



* 0032974000 *

0032974-000

特 264-439

台湾現勢要覽

台湾總督府

昭和7

AFC

特

340
328

特



特264

439



臺灣現勢要覽

發行之所寄贈本



340-328

凡 例

- 一 本書は、本島の現勢を知るの便に資せんが爲め、主要なる事項に就き其の統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は、昭和五年の事實を基礎としたるも、其の最近の統計あるものは努めて之を採り、又昭和五年の事實不明のもの若くは特に必要ありと認めたるものは、昭和五年以前の事實をも掲上せり。
- 三 本書は、特にその變遷消長及び既往との比較の便に供せんが爲め、必要なる事項に就きては累年の事實をも掲上せり。
- 四 本書は、帝國に於ける本島の地位を説明するの便に供せんが爲め、其の必要なる事項に就きては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和七年六月

臺灣總督府

目次概覽

圖表

一	位置……………	一
二	面積及土地……………	五
三	山嶽……………	一一
四	河川……………	一七
五	氣象……………	一九
六	人口……………	二六
七	行政……………	五三
八	警察官署及職員……………	五七
九	農業……………	六〇
一〇	畜産……………	六六
一一	林産……………	六九
III 出生率累年比較		
一	帝國の人口……………	七二
二	帝國の面積……………	七四
三	出生率累年比較……………	七八
四	工業……………	八一
五	糖業……………	八四
六	貿易……………	一〇三
七	財政……………	一〇七
八	專賣……………	一一二
九	金融……………	一二二
一〇	學事……………	一二八
一一	衛生……………	一三七
一二	水利……………	一三七
一三	鐵道……………	一三九
一四	郵便、電信及電話……………	一四二
一五	最近十九箇年の趨勢概覽……………	一四六

目次

目 次					
一 帝國の人口					
二 帝國の面積					
三 出生率累年比較					
一	位置	五		
二	面積及土地	一		
三	一 總面積比較	五		
四	二 州及廳の面積	六		
五	三 土地	八		
六	四 嶽	一		
七	五 山河川	七		
八	六 氣象	九		
九	一 氣溫	九		
一〇	二 雨量	二		
一一	三 暴風	三		
一二	四 人口	六		
一三	五 總人口及比較	六		

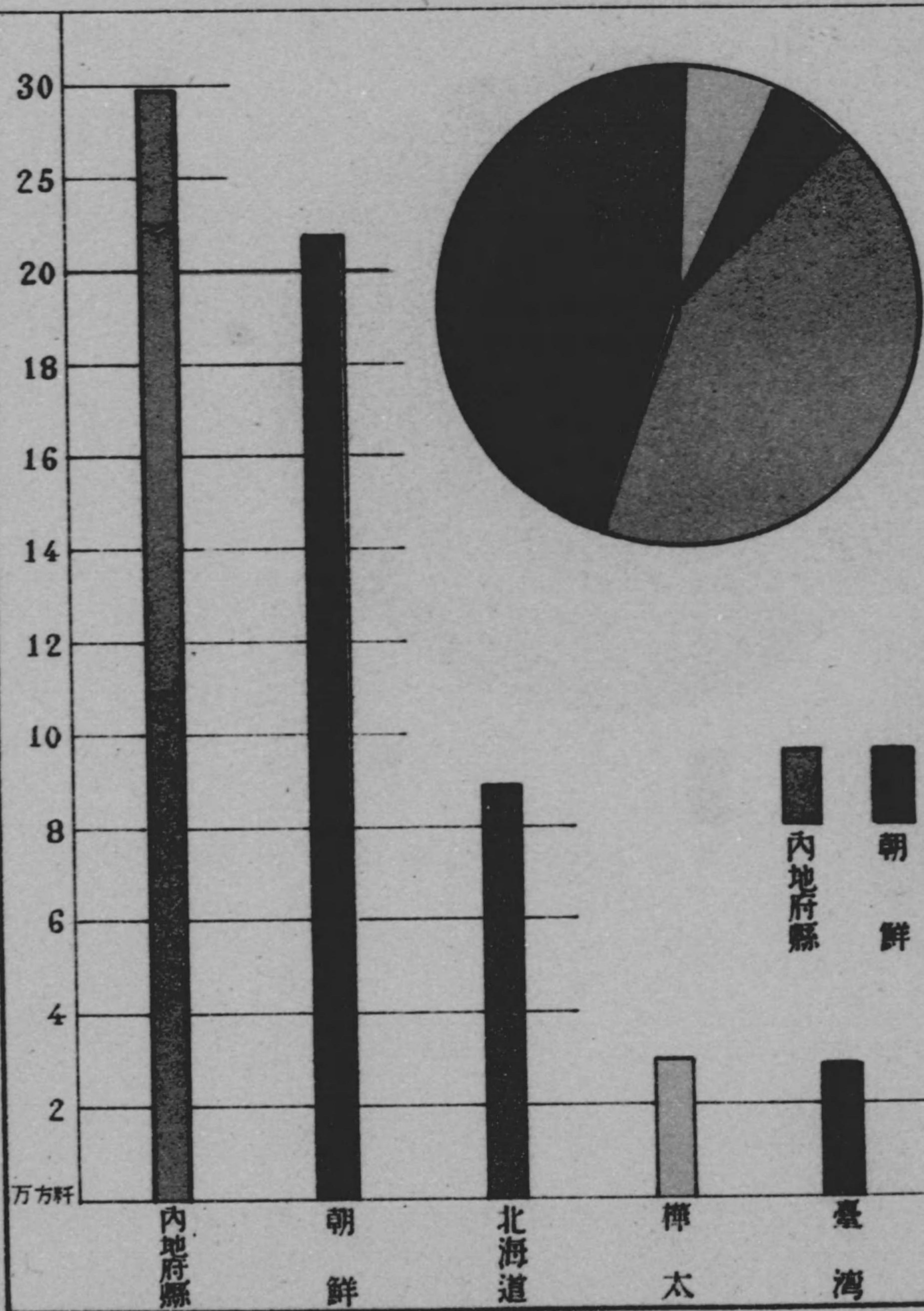
二	州及廳の人口	二八
三	本籍別内地人	三〇
四	在外本島人	三三
五	在留外國人	三五
六	婚姻、離婚、出生及死亡	三六
七	出生率	三八
八	死亡率	四一
九	人口の増加	四四
一〇	蕃社戸口	四七
一一	主要都市人口	四八
七	行政	五三
一	行政區劃	五三
二	行政區劃の沿革	五四
九八	警察官署及職員	五七
九	農業	六〇
一	農業戸數	六〇
二	耕地面積	六一
三	農産	六二
一〇	畜産	六六

一一	林産	六九
一二	鑛業	七二
一三	水産	七四
一四	工業	七八
一五	糖業	八一
一六	貿易	八四
一	貿易總覽	八四
二	對手國別外國貿易	八九
三	中華民國、香港及南洋貿易	九二
四	重要品別外國貿易	九五
五	重要品別内地貿易	九七
六	港別貿易	一〇〇
一七	財政	一〇三
一八	專賣	一〇七
一九	金融	一一一
一	貨幣	一一二
二	銀行	一一二
三	其他の金融機關	一一三
四	物價	一一五

二〇	學事	一八
一	教育概覽	一八
二	社會教育	二三
三	國語を解する本島人	二四
四	臺灣語を解する内地人	二五
二	衛生	二七
一	衛生機關	二七
二	水道	二八
三	ペスト及マラリア	二九
四	阿片	三一
二二	水利	三七
二三	鐵道	三九
二四	郵便、電信及電話	四二
二五	最近十九箇年の趨勢概覽	四六

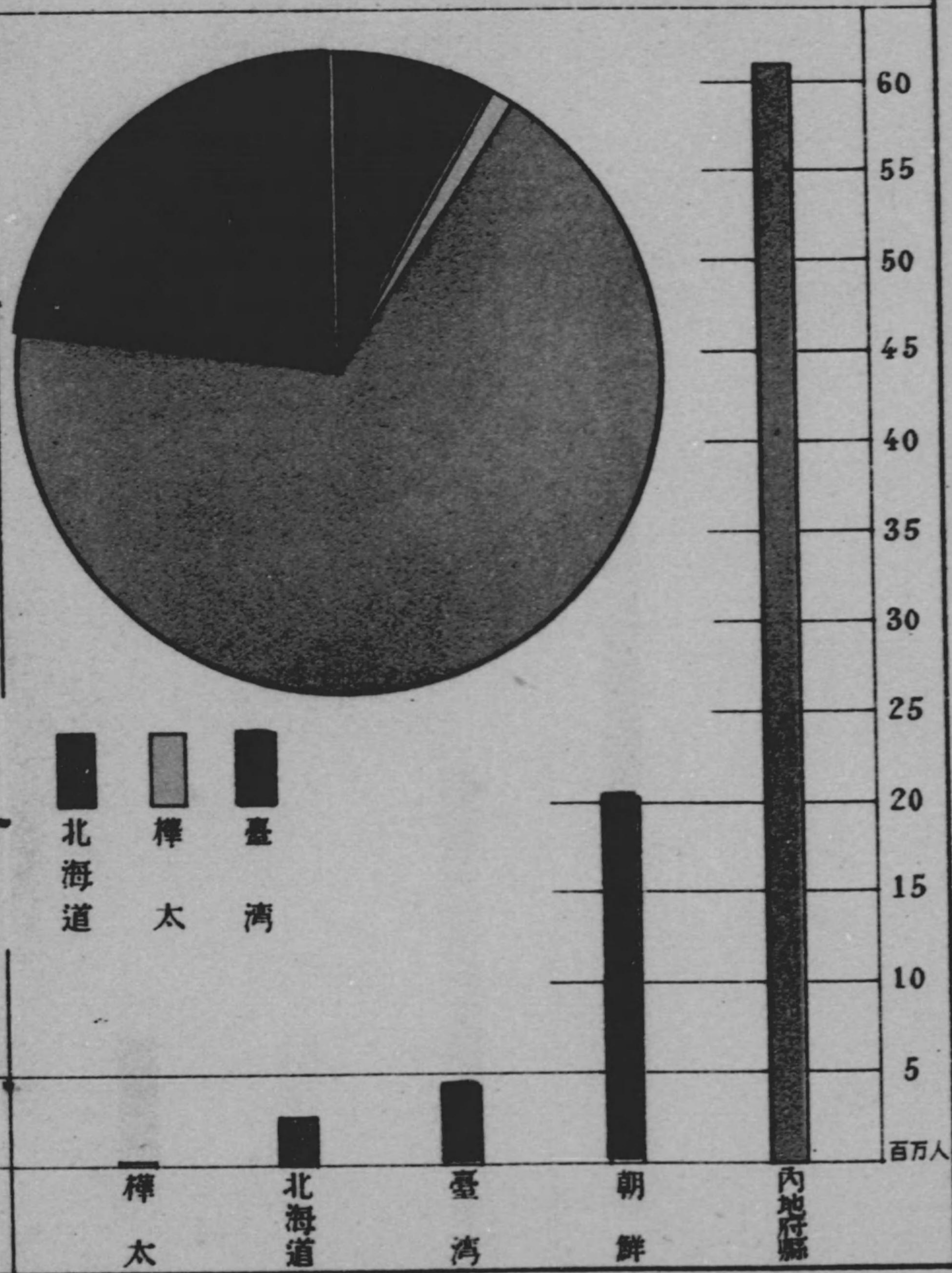
Ⅱ 帝國ノ面積

六七五千方軒 (昭和六年十月現在)



I 帝國ノ人口

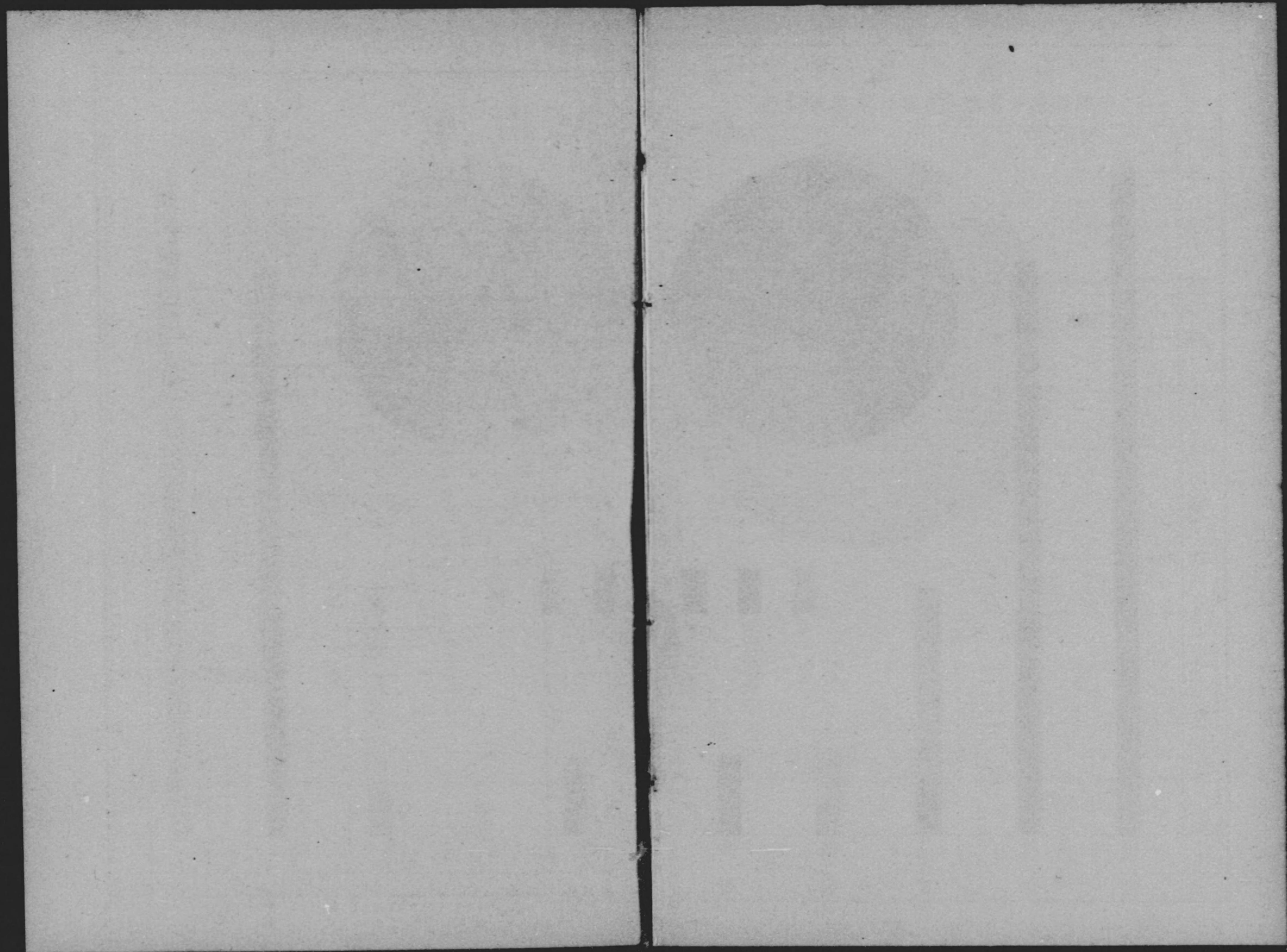
九〇三九六千人 (昭和五年國勢調査)



内地府縣
 朝鮮
 北海道
 樺太
 臺灣

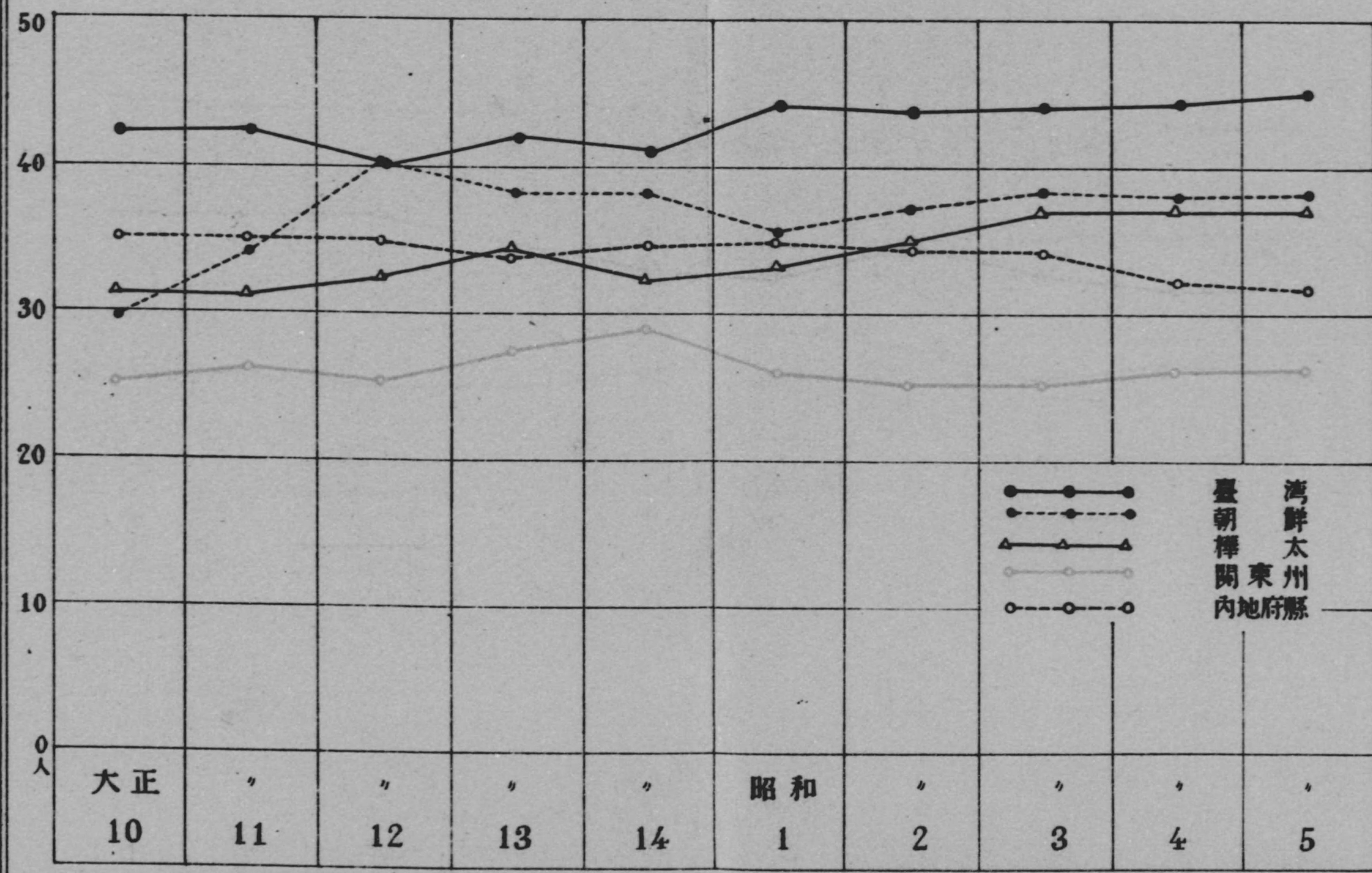
万方軒

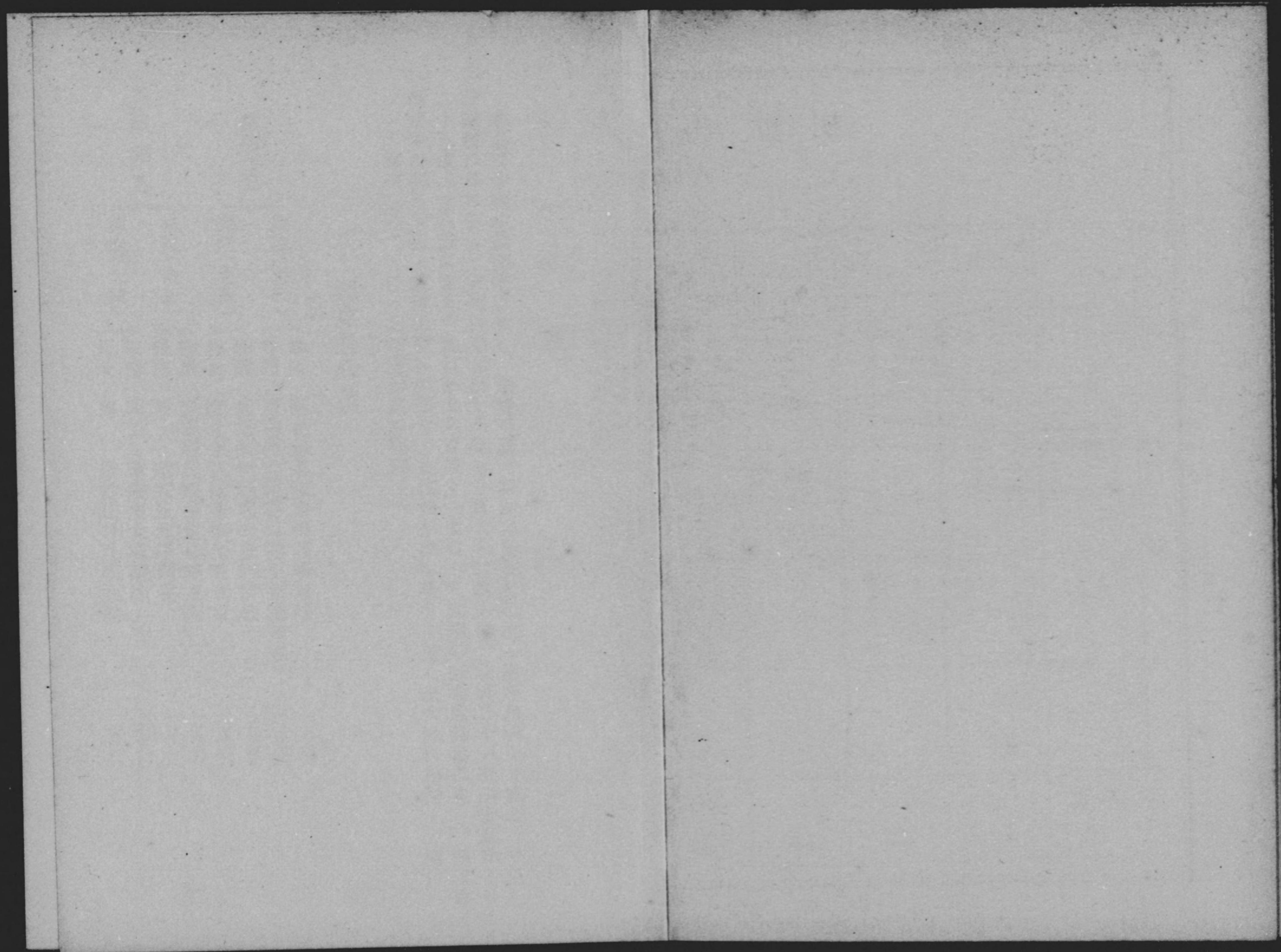
百万人



出生率累年比較

(人口千=付)





盤西海麻香上汕厦福大釜横神門長鹿那

(口) 距

尼 兒

谷貢防刺港海頭門州連山濱戶司崎島霸

(香港經由)

(鹿兒島沖通過)

(門司經由)

離 (基隆基點の直航湮程)

1,900 1,300 961 776 479 418 318 226 151 850 715 1,137 982 739 633 641 334 湮

新 嘉 坡
バ タ ビ ヤ

1,834 2,110

二 面積及土地

一 總面積比較

本島の面積は三萬五千九百方秆にして、帝國の總面積六十七萬五千方秆中その五分三厘を占め、九州よりは稍小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙之を列國の面積に比較すれば、瑞西(四萬一千二百九十五方秆)とサルバドル(三萬四千二百二十六方秆)との中間に位す。

總	臺	朝鮮	樺太	北海道	内地府縣
六五,〇七〇 ^{方秆}	四三,八三三 ^{方里}	一〇〇.〇	三三,九七四	二二,三三三	五三
			三〇,七四一	一四,三三四	三三.七
			三六,〇九〇	二,三四四	五.四
			八八,七七五	五,七六五	一三.一
			二九三,四九〇	一九,〇五八	四.五

本表の外租借地として關東州(州内、鐵道附屬地)の面積三千七百四十三方秆及南洋委任統治區域の面積二千四百四十九方秆あり。
本表は帝國統計年鑑及び拓務省統計概要に依る。

二 州及廳の面積

五州三廳中、面積の最大なるは臺中州の七千三百八十三方秆にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北、臺東の順序を以て之に亞ぎ、最小なるは澎湖廳にして僅かに百二十七方秆なり。

今之を内地府縣に比較すれば、臺中州は熊本、宮城、高雄州は山口、三重、臺南州は和歌山、千葉、花蓮港廳は愛媛、京都、新竹州及臺北州は京都、山梨、臺東廳は奈良、鳥取の各々中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すべき府縣なし。

(イ) 州及廳の面積

全	臺北	新竹	臺南	臺東	高雄	花蓮	澎湖
三、九七三・七	四、五九八・六	七、三八三・四	五、四二一・五	五、七二二・六	三、五二六・四	四、六二八・六	二、三三三・九
方秆	方里	方秆	方里	方秆	方里	方秆	方里
二、三三三・九	二、九六〇・二	二、九八一・六	四、七八七・一	三、五一一・一	三、七二一・〇	二、二八六・四	三、〇〇一・〇
方里	方里	方里	方里	方里	方里	方里	方里
100.0%	二二・七	二二・八	二〇・五	一五・一	一五・九	九・八	一一・九
%	%	%	%	%	%	%	%

内地府縣との比較

澎湖廳	臺南州	新竹州	臺南州	臺東廳	高雄州	花蓮廳	澎湖廳
二、三三三・九	四、五九八・六	七、三八三・四	五、四二一・五	五、七二二・六	三、五二六・四	四、六二八・六	二、三三三・九
方里	方里	方里	方里	方里	方里	方里	方里
三、〇〇一・〇	二、二八六・四	三、七二一・〇	二、二八六・四	三、七二一・〇	二、二八六・四	三、〇〇一・〇	二、三三三・九
方里	方里	方里	方里	方里	方里	方里	方里
一一・九	九・八	一五・九	一五・一	二〇・五	二二・八	二二・七	二二・七
%	%	%	%	%	%	%	%

山梨縣 梨縣 奈良縣 臺東縣 鳥取縣

四、四五四八
三、七三〇・一
三、五二六・四
三、四八九・六

二八八・八三
二四一・八五
三三八・六四
三二六・二五

三 土 地

本島に於ける土地制度の完成は明治三十六年にして以來諸種の産業的施設及び經營の進展に伴ひ逐年土地臺帳登録地を増加し今日に至れり。
昭和六年一月一日現在に於ける有租地は八十三萬八千九百七十九甲、無租地は四十三萬千七百六十七甲、免租地七千三百八十八甲なり。
土地の利用に就き觀察するに本島の總面積は三百六十二萬七千町步(三百七十萬九千甲)にして、内耕作地八十二萬町步(八十四萬甲)、林野二百五十萬町步(二百五十五萬甲)、其他三十一萬町步(三十二萬甲)なり。
今之を内地其他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最大なるは、關東州にして、臺灣は之に亞ぎ、樺太最小なり。林野と耕地との割合を見るに林野の割合最も大なるは樺太にして内地府縣、朝鮮、關東州、臺灣等順次之に亞ぎ北海道最も少し。

實數(町)	(%)	
臺 灣	耕地 四、三七〇、四三五 林野 一六、三六四、六六七	耕地 三三・一 林野 七九・九
朝鮮	耕地 四、三八八、六六四 林野 一六、五九九、〇〇〇	耕地 二〇・九 林野 七九・一
關 東 州	耕地 二七、九九七 林野 二、九三三、二四二	耕地 〇・九 林野 九九・一
樺 太	耕地 二〇五、五二四 林野 九四、六七二	耕地 六八・五 林野 三一・五
北 海 道	耕地 八二八、九〇七 林野 五、四三二、四二二	耕地 一三一・一 林野 八六・九
内地府縣	耕地 五、〇七七、三七七 林野 一五、一五〇、八七二	耕地 二五・一 林野 七四・九

耕地は昭和五年末現在なり。
林野の臺灣、朝鮮、樺太及關東州(州内、鐵道附屬地)は昭和五年末現在、北海道及内地府縣は同四年末現在なり。
朝鮮、樺太、關東州は拓務省統計概要に依る。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

三山嶽

本島は帝國第一の高山、新高山を始め、海拔一萬尺以上四十八座、九千尺級十七座、八千尺級二十四座、七千尺級二十六座を有す。即ち七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帶、暖帶、溫帶、寒帶等垂直的分布の林相を有す。

帝國の全領土を通じて一萬尺以上の高山は總數六十四座を算し、就中本島は四十八座を占め、内地は僅かに十六座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北岳は僅かに四十一位を占むるに過ぎず。

新高山	三、九五〇	米	一
次高	三、九三一		二
秀姑巒山	三、八三三		三
マボラス山	三、八〇六		四
南湖大山	三、七九七		五
富士山(内地)	三、七七三		六
中央尖山	三、七一五		七

順位

槍ヶ岳 (同)	間ノ岳 (同)	北岳 (内地)	パトツノ 山	尖武 山	大風 山	屏風 山	能高 山	小關 山	タロコ 山	郡大 山	カシパ 山	千卓 山	卑南 山	能高山 南峰	南雙頭 山	善萊主 山南峰	白姑大 山
------------	------------	------------	-----------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	----------	---------	---------	-----------	----------	------------	----------

三、一八〇	三、一八九	三、一九二	三、二一一	三、二二二	三、二二三	三、二三四	三、二五二	三、二五五	三、二九二	三、二九二	三、二九四	三、三〇四	三、三〇五	三、三三三	三、三三三	三、三三四	三、三四九
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

四四四 四九六七六 五五三三三 三三〇元八七六

丹畢大 山	シシ 山	桃玉 山	南 山	東北合 歡	北合 歡	合歡 山	東巒 山	卓社 山	善萊主 山	雲萊 山	大霸 山	大郡 山	東郡 山	善萊主 山北峰	大水窟 山	關 山
----------	---------	---------	--------	----------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	---------	---------	------------	----------	--------

三、三七一	三、三七八	三、三八一	三、三九〇	三、三九一	三、三九四	三、三九四	三、三九五	三、四八八	三、五四四	三、五六九	三、五七三	三、六〇〇	三、六〇五	三、六〇五	三、六四五	三、六六七
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

五五四三三三 〇九八七六 五四三三二 〇九八

鎗ヶ岳(同)
ハイノトナシ山

三、二七六
三、一七五

四四
四四

マビーサン山

三、一六七

四六

白石山

三、一三八

四七

ウワノシン山

三、一三二

四八

赤石山(内地)

三、二一〇

四九

奥穂高岳(同)

三、一〇三

五〇

東俣山(同)

三、〇九五

五一

白根山(同)

三、〇九三

五二

御嶽山(同)

三、〇九三

五三

穂高岳(同)

三、〇九〇

五四

安東郡山(同)

三、〇八九

五五

荒川嶽(同)

三、〇八三

五五

西巒大山

三、〇七六

五五

關門山

三、〇五二

五五

大石公山

三、〇四八

五五

鹽見嶽(内地)

三、〇四七

五〇

小雪山

三、〇四三

仙丈岳(内地)

三、〇三三

五五

南岳(同)

三、〇三二

五五

北穂高岳(同)

三、〇三二

五五

内地の分は第四十八回國勢一班に依る。

五五
五五
五五
五五

五 氣 象

一 氣 温

北回歸線は本島南部の嘉義を通過し、半は熱帶圏に位するが故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣温は敢て内地より高度と謂ふにあらず。而も冬季は頗る温暖にして、高山を除いては降雪を見ず。北部の平地に於ては偶々霜を見る事あるも極て稀にして、結氷は領臺以來僅かに二回に過ぎず、南下するに隨ひ氣温は益々高く極南の恒春地方は冬期中と雖も温暖なる好氣候なり。

今内地其他と比較するに、累年平均氣温は我臺灣最も高きも、最高極數の氣温に至りては内地其他の地域に却つて高き處あるを見る事少なからず。即ち臺中の三十九度三分は新潟の三十九度一分よりは二分高く、又臺南の三十六度九分は京城の三十七度五分よりは六分低く、臺北の三十八度六分は大阪の三十七度六分より一度高し。更に恒春の三十五度(釜山、旭川と同じ)及澎湖の三十三度九分は大泊、函館を除けば他の何れの地方よりも低し。

臺 灣

昭和五年	平均	攝氏	最高の極	年 月	攝氏	最低の極	年 月
年平均							
攝氏							

旭 札 函 北 關 樺 朝 基 臺 臺 澎 臺 臺 恒
 海 東 州 泊 太 津 城 山 鮮 隆 北 中 湖 南 東 春

川	幌	館	道	順	州	泊	太	津	城	山	鮮	隆	北	中	湖	南	東	春
五八	七七	八八	一〇六	二〇	八六	一四二	二一八	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
五三	六九	八五	一〇二	二九	七九	一〇九	一三五	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二六
三五九	三五五	三五五	三五四	三〇四	三七五	三七五	三五三	三七九	三八六	三九三	三九三	三九三	三九三	三九三	三九三	三九三	三九三	三九三
昭和三一八	大正三三七	三七一八	大正八一八	昭和三一八	大正八一七	昭和三一八	昭和三一八	大正一五八	大正一〇七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七	昭和三一七
(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)
四一〇	二八〇	二二七	一九三	三二七	二四六	一四〇	二二〇	三〇	〇二	一〇	七三	二四	七四	九五	九五	九五	九五	九五
昭和三一	昭和三一	昭和三一	大正六一	昭和三一	大正八一	大正八一	大正八一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一

臺 恒
 春 灣

一三三二

二二八八

一三〇一

八一九

二 雨 量

青 新 東 大 長 那
 森 潟 京 阪 崎 那

縣 府 府 府 府 府

九三	一三二	一四八	一五九	一七九	二二二
九三	一二六	一三九	一五一	一五六	二二〇
三六〇	三九一	三六六	三七六	三六七	三五五
大正四一八	四二一八	一九一七	四二一八	二七一八	大正五七七
(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)
一九〇	九七	八六	七一	五六	四九
昭和三一	昭和三一	昭和三一	昭和三一	大正四一	大正七一

本島は南北に依り其の降雨期を大いに異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月間、南部は五月より九月に至る夏期五箇月間を雨期とす。北部は基隆市附近最も雨量多く、基隆市に近き暖々は一年五千百餘耗を算し、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては湖州郡蕃地クワルスの四千三百餘耗最多雨量を示し、最も少きは澎湖島にして一年の總量一千餘耗なり。

之を内地其の他と比較するに、本島は全島を通じて一般に他の地方よりも雨量多し。

昭和五年
總雨量

累年平均
總雨量

昭和五年
最多日量

耗

月日

函	北	關	津	城	釜	朝	暖	基	臺	臺	阿	澎	臺	臺	蕃
海	旅	東	太	大	京	釜	暖	基	臺	臺	阿	澎	臺	臺	地
館	道	順	州	泊	津	城	山	鮮	々	隆	北	中	山	湖	南
															東
															里
															ク
															ワ
															ル
															ス
一、二二一	六二九	八六三	七四〇	一、六二五	一、六二七	五、一六	三、一〇七	二、二五三	二、二〇八	四、七九八	一、〇八六	二、〇四〇	一、〇二八	四、三三五	
一、一六二	五七七	七二五	七二三	一、四一六	一、二四九	五、〇七二	二、九二一	三、一一九	一、七五一	三、九六五	九八六	一、六九九	一、八一〇	五、二九九	
六五	一四八	六二	六四	一三九	一五〇	三二一	三三一	三五九	二四六	五〇二	一六二	一七七	一七七	二八三	
九一四	七一五	八一〇	七一九	八一六	七一八	七一七	七一八	七一八	七一八	七一八	七一八	七一八	七一八	七一八	

三三 暴風

青	新	東	大	長	那	内	旭	札
森	鴻	京	阪	崎	那	地	旭	札
						府	旭	札
							川	幌
							川	幌
一、〇九三	一、七六二	一、四七七	一、〇五六	一、六二八	二、〇六七	一、二九七	一、一五二	一、一五二
一、三八七	一、七八八	一、五七四	一、三五五	一、九七一	二、一〇六	一、〇六九	一、〇三〇	一、〇三〇
七一	一四	九三	七一	二二	二五	一〇	八	八
六一七	七一〇	七一〇	八一	七一八	七一七	七一〇	八一〇	八一〇

颶風と稱する熱帯暴風の進路に當る本島に於ては、概ね毎年其の襲來を受け往々甚大なる被害を蒙る事あり。明治三十年乃至昭和四年間に本島に多少なりとも損害を與へたる暴風は實に八十二回、即ち平均一年に二回強なり、最も多かりしは大正三年の七回にして第一位を占め、明治三十六年の六回之に亞ぐ。之を月別に見るに八月に於て最も多し。

回	五月	六月	七月	八月	九月	十月
數	一	六	三	三	一六	七

%

—

七

三

八

一

九

六 人口

一 總人口及比較

本島の總人口は明治三十八年末に於て、三百十二萬人なりしが、大正元年末には三百四十五萬人に増加し、更に同十年末には三百八十三萬人に、昭和元年末には四百二十四萬人に増加せり。

今昭和五年末現在に就きて見るに總人口四百六十八萬人にして内、内地人二十三萬人、本島人四百三十萬人、普通行政區域居住の蕃人を含む)、蕃人八萬六千人(蕃地居住者のみ)、外國人四萬七千人なり。

昭和五年末現在帝國の總人口は九千六十萬人を算し、臺灣は四百六十八萬(蕃地居住の蕃人を含む)にして實に其の五分を占む。

(イ) 種族別人口 (昭和五年末現在)

種族	總數		男		女		%
	總數	男	女	男	女		
内地人	46,066	23,967	22,066	10,706	11,260	100.0	
本島人	322,299	155,238	167,061	50	50	50.0	
蕃人	43,393	21,954	21,440	922	922	92.2	
外國人	46,154	43,525	42,629	18	18	1.8	

外國人

46,691

32,495

14,196

1.0

(ロ) 内地其他との比較 (昭和五年末現在)

種族	總數	%	密度	
			一方里に付	一方里に付
臺灣	9,587,059	100.0	124	11,041
朝鮮	4,679,066	5.2	30	11,006(3,691)
北樺太	20,256,563	2.4	92	1,415
北海道	28,493,000	0.3	7	133
内地府縣	28,733,300	3.1	33	501
内地府縣	62,493,200	69.0	23	3,285

本表の外租借地としての關東州(州内、鐵道附屬地)は人口百二十九萬二千二百一十一人を有し、一方里に付三百四十三人(一方里に付五千三百七人)及南洋委任統治區域は人口六萬九千六百一十六人を有し、一方里に付人口三十二人(一方里に付四百八十人)を算す。

括弧内の數字は平地面積に對する平地人口の割合を示す。朝鮮、樺太、關東州及南洋委任統治區域は拓務省統計概要に依る。南洋委任統治區域は昭和五年十月一日現在なり。

北海道、内地府縣は昭和六年十月一日現在にして帝國統計年鑑に依る。

二 州及廳の人口

五州三廳中人口の最も多きは臺南州の百十八萬人にして、臺中州は百二萬人を以て之に亞ぎ、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、澎湖、臺東の順位を以てす。人口密度を見るに一方里に付澎湖廳の七千六百二十一人を最高とし、臺東廳の七百三十三人を最低とす。次に昭和五年十月一日に於ける臺灣現住人口を内地府縣に比較すれば、臺南州は岐阜、三重、臺中州は山形、秋田、臺北州は大分、青森、新竹州及高雄州は滋賀、山梨の各中間に位し、花蓮港、臺東及澎湖の三廳は人口寡少にして比較すべき府縣なし。

(イ) 州及廳の人口 (昭和五年末現在)

全	臺南	臺中	新竹	臺北	臺東
四、五九、九三三	一、一八〇、〇〇五	一、〇一六、〇一四	六六九、三八二	九三三、四八三	六〇八、四六五
100.0	二五八	二三・一	一四六	二〇・三	一三・二
密度(一方里に付)					
平地(蕃地を控除)面積(せる面積)	三、六八三	四、四一九	三、九二六	五、二六八	三、二八三
全面積	三、三五六	二、二二二	二、二四五	三、一五三	一、六四〇

高雄州 六〇八、四六五 一三・二 三、二八三 一、六四〇
 臺東廳 四七、五四二 一・〇 七三三 二〇八
 花蓮港廳 七五、三〇〇 一・六 八六〇 二五一
 澎湖廳 六二、七二二 一・四 七、六二二 七、六二二

本表には蕃地に居住する蕃人を含まず、但し一方里に付人口の全面積には蕃地居住の蕃人をも加算せり

(ロ) 内地府縣との人口比較 (昭和五年) 十月一日現在

岐阜	臺南	三臺	山形	臺中	秋田	大分	臺南	青森
一、一七八、四〇五	一、一五九、六四六	一、一五七、四〇七	一、〇八〇、三三四	一、〇二〇、五四六	九八七、七〇六	九四五、七七一	九三三、五三二	八七九、八一四

滋賀	新井	高梨	山梨	福井	花蓮	澎湖	臺灣
滋賀	新井	高梨	山梨	福井	花蓮	澎湖	臺灣
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣

六九一、六三一	六六四、七一	六三三、三一九	六三一、〇三七	六二一、一〇〇	八六、八五九	六〇、三四	五八、八〇一
---------	--------	---------	---------	---------	--------	-------	--------

三 本籍別内地人

本島在住内地人の總數は昭和四年末現在(警務局調査)に於て二十一萬五千七百六十六人にして内、鹿兒島縣の二萬五千四百八十五人第一位を占め、熊本縣は二萬二千百三十七人にて之に亞ぎ、福岡縣は遙かに下りて一萬二千八百四十二人を以て第三位に在り、廣島、山口の二縣順次之に亞ぎ、最も少きは青森縣の四百六十一人なり。

總數	人口	%	順位
二五、七六六	100.0		1
二五、四八五	100.0		1
二二、一三七	100.0		2

福廣山	佐長東宮大	沖新宮大	愛岡愛	高
-----	-------	------	-----	---

岡島口	賀崎京城分	繩鴻崎阪庫	媛山知	知
-----	-------	-------	-----	---

一二、八四二	九、八二九	九、五〇三	九、四九二	八、五一一	七、三〇七	七、〇六六	六、四二五	五、八二二	五、二九〇	四、九八八	四、九〇九	四、七二三	四、六六七	四、一六〇	三、九八四	三、五九〇
--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

六〇	四六	四四	四四	四四	三九	三四	三四	三〇	二七	二五	二三	二三	二二	二二	一九	一八	一七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

山	神	福	鳥	三	千	和	京	德	長	香	島	石	靜	茨	岐	福
奈	歌															
形	川	井	取	重	葉	山	都	島	野	川	根	川	岡	城	阜	島
一、七九九	一、九〇八	一、九六八	一、九九七	二、〇一一	二、一一一	二、三七一	二、四三三	二、四四三	二、五二〇	二、六八九	二、七四七	二、八一一	二、八五三	二、八五七	二、九〇三	三、〇一一
〇・八	〇・九	〇・九	〇・九	〇・九	一・〇	一・一	一・一	一・一	一・一	一・二	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・四
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

青	奈	岩	秋	崎	栃	北	山	群	富	滋
森	良	手	田	玉	木	道	梨	馬	山	賀
四六一	一、〇二四	一、〇六一	一、〇八〇	一、二〇九	一、二七六	一、二九五	一、三五一	一、五四三	一、五四七	一、七六三
〇・二	〇・五	〇・五	〇・五	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・七	〇・七	〇・八
四	四	四	四	四	四	四	四	四	三	三

本表の外樺太人二十七人あり。

四 在外本島人

在外本島人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は中華民國に在留す。即ち中華民國在留本島人の總數は四千二百三十六人にして内、三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

中華民國以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人之に亞ぐ。

總數	四、七八五	三、〇二五	一、七〇〇
關東州	一九	一四	五
中華民國	四、二四〇	二、六二八	一、六二二
廈門	三、〇八五	一九二一	一、二七四
福州	七六六	四四八	三二八
汕頭	二三六	一六三	七三
廣東	三一	一八	一三
青島	二八	八五	三三
其他	四	三	一
爪哇	二二八	一四九	六九
海峽植民地	一〇五	八一	二四
新嘉坡	三三	二六	七
シヨホール州	三五	二六	九
其他	三七	二九	八
緬甸	七六	三八	三

香港	五七	四二	一五
暹羅	三五	三〇	五
比律	三一	二九	二
濠洲	三	三	一
智利	一	一	一

五 在留外國人

本島在留外國人の總數は明治三十八年末に於て八千二百二十三人に於て大正元年には一萬七千九百二十九人に、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば二萬三千六百六十四人に増加し更に昭和五年末現在（警務局調査）に依れば四萬五千七百七十一人に達せり。昭和五年末現在に於ける外國人の國籍を釋ぬるに、中華民國人其の大部分を占め、英人、北米人順次に亞ぐ。

昭和五年末現在

總數	四五、六〇〇
中華民國	四三、七七一
英吉利	九三
北美合衆國	三五
西班牙	二三
露西亞	七

和 葡 英 獨
蘭 牙 領 逸
獨 英 葡 和
領 牙 領 蘭
逸 牙 逸 蘭

六 婚姻、離婚、出生及死亡

本島に於ける最近十九年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、人口千に付婚姻は大正元年の十一件三分より昭和五年の十件一分に減少し、離婚は同じく一件五分より昭和五年の九分に減少し、出生は一般に増加の傾向を有し、大正元年の四十一人九分より昭和五年の四十五人に増加せり。死亡は年に依り相違ありき雖も漸減の狀態にあり、大正四年及び同五年に於て死亡者の多きはマラリア患者の發生に因由し、大正七年及び同九年に於て多きは、流行性感冒の發生に因由するものなり。故に大正七年の如きは三十四人八分の多きに達したるも、昭和五年には十九人五分に減退したり。従つて人口の自然増加は年により懸隔ありき雖も漸増し、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしが、昭和五年には十一萬七千人の多きに達したり。

大正	年	婚姻	離婚	生産(出生)	死亡	自然増加
同	一	三三、九七九	五、〇八二	一四〇、四九八	八四、九六三	五五、五三五
同	二	三六、一六七	五、一六〇	一四一、三七九	八六、六一〇	五四、七六九
同	三	三三、九七七	四、六六四	一四六、一三六	九七、五二一	四八、六一五

同 同 同 同 昭 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
和

五 四 三 二 一 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四

三八、五八六	五、一九五	一四二、五〇五	一一二、一三三	三〇、三八二
三七、六〇四	五、四四五	一三三、七二七	一〇一、五一九	三一、一九八
三八、〇九五	五、〇七八	一四八、二〇九	九七、九四九	五〇、二六〇
四〇、九〇二	四、九六八	一四五、一六二	一二四、六七七	二〇、四八五
三八、三四一	五、一六五	一四二、三二〇	九八、九九一	四三、三一九
四〇、九一五	四、七二二	一四七、三〇八	一一九、四七七	二七、八三一
四〇、八二九	四、六五八	一六一、九八七	九一、五二三	七〇、四七四
三七、八三一	四、二二五	一六一、八二九	九五、三七二	六六、四七七
三九、四八〇	四、三三八	一五四、〇七八	八四、一〇八	六九、九七〇
四二、一〇一	四、四五七	一六六、一八三	九八、四〇五	六七、七七八
三七、六〇三	四、〇六六	一六六、九〇一	九八、〇四三	六八、八五八
四六、七七八	四、八一二	一八三、三六〇	九三、七二〇	八九、六四〇
四五、五七二	四、五五四	一八五、一九五	九四、八四三	九〇、三三三
四二、六七九	四、五〇六	一九一、八三九	九六、三一〇	九五、五二九
四六、八一六	四、四六三	一九七、九六七	九六、八七〇	一〇一、〇九七
四六、三六四	四、三〇〇	二〇六、七三二	八九、六五四	一七、〇七八

七 出生率

本島の出生率は之を最近十九年間に就きて観るに、年に依りて増減ありと雖も、概して増加の趨勢にあり、昭和五年は人口千に付四十五人を示せり。總するに内地人の出生率在此處數年來減少しつゝ、あるは無配偶者多く且つ其の他種々の原因に依るもの、如し。更に之を内地其の他と比較するに本島は其の率最も高く朝鮮之に亞ぎ、關東州最も低し。又列國中出生率の最も高きは智利の四十人一分(昭和四年)なるが故に、本島の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

出生率 (人口千に付)

年	平均		内地人		本島人		外國人	
	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和
一	四一九	四〇二	二九八	四二五	四二〇	一一八	一五五	二〇三
二	四一四	四〇二	三〇七	四二〇	四二八	一六〇	一八八	二〇三
三	四二二	四〇九	三〇八	四二八	四二四	一八〇	一九二	二〇三
四	四〇九	三八一	三二七	三九五	三八四	一八六	一九二	二〇三
五	四一六	三九六	三七四	三九四	四一九	一八六	一九二	二〇三
六	四〇五	三九六	三五四	三九四	四〇九	一九二	一九二	二〇三
七	三九二	三九六	三三二	三九六	三九六	一九二	一九二	二〇三

同同同同昭同同同同同同同
和

同同同同大
正

五 四 三 二 一 年 (イ) 五 四 三 二 一 四 三 二 一 〇 九

年	内地其他との出生率累年比較 (人口千に付)		臺灣		朝鮮		樺太		關東州		北海道		内地府縣	
	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和	大正	昭和
一	四〇二	四〇二	三二八	四〇二	二八九	三二〇	二九六	四〇六	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
二	四三二	四〇二	三五二	四〇二	二九七	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
三	四三二	四〇二	三三六	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
四	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
五	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
六	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
七	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
八	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
九	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一〇	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一一	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一二	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一三	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一四	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一五	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一六	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一七	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一八	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
一九	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六
二〇	四三二	四〇二	四〇二	四〇二	二八二	三二〇	二九六	四三二	二九六	四二五	四二五	三二九	四二五	二一六

同同同同昭同同同同同同同同同同同同同

和

— — — — —

五 四 三 二 一 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四

一九五	二二七	三三一	三三三	三三六	三四一	三四九	二二六	二五〇	二四四	三三五	二七三	三四八	二七五	三三二
一八九	二三九	二二六	二二五	二〇三	二〇六	二二四	二〇五	二二四	一九八	三三四	三二九	三〇七	二四一	二二一
二〇三	二二八	二二二	二六二	一九〇	一八七	二六〇	二四六	二〇二	二五七	三四二	三三一	三六二	二七一	二二九
一五一	一八七	一七六	一五三	一八六	一六六	一五八	一六〇	一五六	一五二	一五八	二二六	二二七	二二八	一七〇
一七〇	一九三	一八七	一九五	一七一	一九二	一六五	一七九	一七六	一八二	二一九	二一九	二四九	二〇五	一九〇
一八〇	二〇一	二〇〇	一九八	一九三	二〇三	二二五	二三〇	二二五	二二九	二四六	二三四	二六四	二二四	二〇〇

朝鮮、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。
 樺太は同廳人口統計に依る。

同同大 同同同同昭同同同同同同同同同

正

和

三二一年 (口) 五 四 三 二 一 四 三 二 一 〇 九 八 七

二八一	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三
一九三	一八〇	一六〇	三二五	二八五	二四五	二四五	二四五	二四五	二四五	二四五	二四五	二四五	二四五	二四五
二四九	二二七	三三一	三三三	三三六	三四一	三四九	二二六	二五〇	二四四	三三五	二七三	三四八	二七五	三三二
一九五	二二七	三三一	三三三	三三六	三四一	三四九	二二六	二五〇	二四四	三三五	二七三	三四八	二七五	三三二
一九六	一九八	一九一	一九三	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七
二〇〇	二〇二	二〇六	二〇九	二一〇	二一三	二一四	二一七	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九
二〇四	一九四	二〇八	二〇七	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九
二〇四	一九三	一九八	二〇六	一九〇	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二

内地其他との死亡率累年比較 (人口千に付)

臺灣 朝鮮 樺太 關東州 北海道 内地府縣

九 人口の増加

本島の人口を、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしも、大正元年末には三百三十五萬に、更に昭和元年末には四百十六萬に増加し、昭和五年末には四百五十九萬に達し、過去十九年間に三割七分の増加を示せり。
 更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の率最も大なるは樺太にして、關東州之に亞ぎ、北海道、朝鮮、臺灣、内地の順位を以て之に亞ぐ。

最近十九年間の人口 (各年末現在)

年	總數	男	女	指數
大正	三,三五三,九四三	一,七六三,四八四	一,五九〇,四五九	二〇〇
〇	三,四一八,二七〇	一,七九四,八〇八	一,六三三,四六二	二〇三
一	三,四六八,七一九	一,八一八,〇五六	一,六五〇,六六三	二〇三
二	三,四八三,二六六	一,八一四,九四四	一,六六八,三二二	二〇四
三	三,五〇一,一〇〇	一,八二四,一五〇	一,六八五,九六〇	二〇五
四	三,五〇六,〇五〇	一,八四六,四四五	一,七一三,六〇五	二〇六
五	三,五八三,三九五	一,八五六,一七八	一,七二七,二一七	二〇七
六	三,六三〇,三八五	一,八七八,八一〇	一,七五一,五七五	二〇八
七	三,六七三,二九〇	一,九〇二,七九〇	一,七七〇,五〇〇	二一〇
八				
九				
昭和				
〇	三,七五一,二二七	一,九四一,五八二	一,八〇九,六三五	二一三
一	三,八二一,五二八	一,九七四,八一四	一,八四六,七二四	二一四
二	三,八九一,九二一	二,〇〇八,〇九〇	一,八八三,八三一	二一六
三	三,九五六,七〇六	二,〇三八,一八三	一,九一八,五二三	二一八
四	四,〇六一,五二四	二,〇八七,九一九	一,九七三,六〇五	二三一
昭				
一	四,一五五,〇二六	二,一三二,九九八	二,〇二一,〇二八	二三四
二	四,二五〇,一六〇	二,一七九,九五三	二,〇七〇,二〇七	二三七
三	四,三五二,八二八	二,二三一,〇三八	二,一二〇,七九〇	二三〇
四	四,四六二,六三一	二,二八六,七四九	二,一七五,八八二	二三三
五	四,五九二,九二二	二,三五三,二〇五	二,二三九,七〇七	二三七

年	總數	男	女	指數
大正	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
〇	一〇一	一〇四	一〇五	一〇一
一	一〇三	一〇七	一〇七	一〇三
二	一〇四	一〇八	一〇八	一〇四
三	一〇四	一〇九	一〇九	一〇四
四	一〇五	一〇九	一〇九	一〇五
五	一〇六	一〇九	一〇九	一〇六
六	一〇七	一〇九	一〇九	一〇七
七	一〇八	一〇九	一〇九	一〇八
八	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
九	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
昭和				
〇	一一一	一一一	一一一	一一一
一	一一二	一一二	一一二	一一二
二	一一三	一一三	一一三	一一三
三	一一四	一一四	一一四	一一四
四	一一五	一一五	一一五	一一五
五	一一六	一一六	一一六	一一六
六	一一七	一一七	一一七	一一七
七	一一八	一一八	一一八	一一八
八	一一九	一一九	一一九	一一九
九	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇

内地其他の人口指數累年比較 (各年末現在)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正	100	100	100	100	100	100
〇	101	104	105	100	100	101
一	103	107	106	101	104	103
二	104	110	107	105	104	104
三	104	110	107	105	104	104
四	104	110	107	105	104	104
五	105	111	107	105	104	105
六	106	112	108	106	105	106
七	107	113	109	107	106	107
八	108	114	110	108	107	108
九	109	115	111	109	108	109
昭和						
〇	110	116	112	110	109	110
一	111	117	113	111	110	111
二	112	118	114	112	111	112
三	113	119	115	113	112	113
四	114	120	116	114	113	114
五	115	121	117	115	114	115
六	116	122	118	116	115	116
七	117	123	119	117	116	117
八	118	124	120	118	117	118
九	119	125	121	119	118	119

本表には蕃地に居住する蕃人を除き、普通行政区域内に居住する蕃人は之を算入せり。

一一 主要都市人口

本島には昭和五年末に於て七市、三十六街あり。内、人口二萬以上の市及街は二十六にして、その第一位を占むるは臺北市の二十四萬、之に亞ぐは臺南市の九萬八千、基隆市の七萬八千、高雄市の六萬三千、嘉義市の五萬八千、臺中市の五萬五千、新竹市の四萬六千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東、花蓮港の兩街は僅かに一萬を有するのみなり。

次に島内に於ける七市及主なる二街を内地其の他の都市に比較するに、昭和五年十月一日現在に依れば、我が臺北市は、大阪、東京、名古屋、神戸、京都、横濱、京城、廣島の八市に亞で實に第九位を占め、福岡市の上に位し、臺南市は濱松、徳島、基隆市は富山、長野、高雄市は山形、盛岡、臺中市は宮崎、八戸、新竹市は福島、米澤各市の各々中間に位し、而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首都豊原よりも遙に少し。

(イ) 主要都市の人口 (昭和五年末現在)

都市名	總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	二四〇,四三五	七〇,三六九	一五四,六九九	一五,三七二	一
臺南市(臺南州)	九八,二二四	一五,四九六	七八,七四四	三,八七四	二
基隆市(臺北州)	七八,二二四	一九,二五四	五四,六九九	四,二九一	三
高雄市(高雄州)	六二,六三三	一五,八七八	四四,八九三	一,八六二	四

嘉義市(臺南州)	五八,二七六	八,八八三	四七,六四九	一,七四四	五
臺中市(臺中州)	五五,三四七	一三,四四五	四〇,四〇二	一,五〇〇	六
新竹市(新竹州)	四五,八六七	五,三二八	三九,九七一	五,六八	七
鹿港街(臺中州)	三六,三一八	二,六五	三五,八三三	二,二〇	八
屏東街(高雄州)	三五,〇一九	四,七二九	二九,一二四	一,一六六	九
斗六街(臺南州)	三一,八五一	一,〇六五	三〇,五三五	二,五二	一〇
清水街(臺中州)	二九,八九八	四一五	二九,四〇〇	八三	一一
員林街(同)	二八,八九七	七一一	二七,八七三	三三三	一二
大溪街(新竹州)	二八,四八五	四一五	二八,〇〇九	六一	一三
豐原街(臺中州)	二八,四六五	八一六	二七,四四五	二〇四	一四
麻豆街(臺南州)	二八,一六三	七二〇	二七,三五二	九二	一五
埔里街(臺中州)	二七,〇五六	九四九	二五,八六九	二三八	一六
南投街(同)	二五,八二八	八四九	二四,八七六	一〇三	一七
宜蘭街(臺北州)	二四,五六六	二,三六七	二二,八九一	三〇八	一八
中壢街(新竹州)	二四,五〇八	三八九	二四,〇二四	九五	一九
淡水街(臺北州)	二四,〇五六	七九〇	二二,九〇八	三五八	二〇
北港街(臺南州)	二三,三六一	一,〇〇一	二二,〇九八	二四一	二一

臺花豐 米新福 八臺宮 盛高山 長基富
 東港(大) 澤竹島 戶中崎 岡雄形 野隆山

七五、〇九九
 七五、〇七六
 七三、九一一
 六三、四三三
 六二、六九七
 六二、二四九
 五四、六〇〇
 五四、一〇〇
 五二、九〇七
 四五、六九二
 四五、六九二
 四四、九三六
 四四、七三一
 三一、六五〇
 一一、九九〇
 一〇、四六六

德臺濱 福臺廣
 島南松 岡北島

二七〇、三六五
 三三〇、四九〇
 二二八、二八九
 一〇九、四七五
 九四、四九五
 九〇、六三四

(口)

内地其の他の都市との人口比較

(昭和五年十月一日現在)

西螺街(臺南州) 三三、九七八 一七八 二二、六八四 二一六
 彰化街(臺中州) 三三、九五九 一、四二五 二〇、八〇六 七二八
 桃園街(新竹州) 三三、三一八 七八〇 二一、四〇七 一三一
 馬公街(澎湖廳) 三三、一九〇 二、九八四 一九、一五九 四七
 大甲街(臺中州) 三三、一七八 二六四 二一、八〇六 一〇八
 花蓮港街(花蓮港廳) 一一、六六七 四、九〇三 五、九一〇 八五四
 臺東街(臺東廳) 一〇、六二九 二、〇五一 八、〇三二 五四六

本表には人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮港兩街を掲ぐ。

元 七 六 五 四 三 三

澎湖	花東	臺南	高雄	臺南	新臺中	新竹	北	全
廳	廳	廳	州	州	州	州	州	島
1	1	1	7	0	2	8	9	望郡
2	4	4	1	1	1	1	1	支廳
1	1	1	1	2	1	1	2	市
1	1	1	4	7	0	4	6	三街
4	1	1	0	5	5	3	3	三庄
1	8	0	1	1	1	1	1	六區

本島の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官官制に根本的改革を加へ、從來の十二廳を五州二廳に改めたりしが、大正十五年七月一日更に澎湖廳を設置して三廳となし現に五州は之を七市四十五郡に分ち、郡の下には三十四街、二百二十五庄を置き、三廳は之を十支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十八區を置く。昭和六年末現在

七 行政 政

一 行政區劃

大正十七年五月	同九年九月	明治四十四年二月十五日	同十四年三月十一日	同十五年四月十五日	三年三月十五日
臺北州	臺北州	臺北廳	臺北廳	臺北廳	臺北廳
新竹州	新竹州	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳
臺中州	臺中州	桃園廳	桃園廳	桃園廳	桃園廳
臺南州	臺南州	新竹廳	新竹廳	新竹廳	新竹廳
高雄州	高雄州	臺中廳	臺中廳	臺中廳	臺中廳
臺東廳	臺東廳	南投廳	南投廳	南投廳	南投廳
花蓮港廳	花蓮港廳	嘉義廳	嘉義廳	嘉義廳	嘉義廳
澎湖廳	高雄州	臺南廳	臺南廳	臺南廳	臺南廳
		鳳山廳	鳳山廳	鳳山廳	鳳山廳
		阿猴廳	阿猴廳	阿猴廳	阿猴廳
		恒春廳	恒春廳	恒春廳	恒春廳
		臺東廳	臺東廳	臺東廳	臺東廳
		澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳

同十一年十一月二十日	同十三年十月十日	同十二年九月十四日	同十二年八月十三日	同十二年八月十四日	同十二年八月十一日
臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣
宜蘭廳	宜蘭廳	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣
臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣
臺中縣	臺中縣	臺中縣	臺灣民政部	臺灣民政部	臺灣縣
嘉義縣	嘉義縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣
臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣
鳳山縣	鳳山縣	鳳山縣	臺南民政部	臺南民政部	臺南縣
臺東廳	臺東廳	臺東廳	澎湖島	澎湖島	澎湖島
澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖島	澎湖島	澎湖島

二 行政區劃の沿革

本島の警察署には郡役所警察課及支廳を言む。
朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依る。
北海道、内地府縣は昭和四年末現在にして帝國統計年鑑に依る。

九 農 業

一 農業戸數

本島の農業戸數は四十一萬戸にして、總戸數の約五割を占め、農業者一戸當平均耕地面積は二町(二甲強)に當る。

今之を内地其の他と比較するに、總戸數に對する農業戸數の割合最も大なるは、朝鮮の七割五分にして、本島は第二位を占め、樺太は僅かに一割七分を以て最下位に在り。農業者一戸當平均耕地面積最も大なるは、北海道の四町五段にして、關東州の三町三段、樺太の二町九段之に亞ぎ、本島は第四位を占め、内地府縣は九段歩を以て最下位に在り。

農業戸數

總戸數百に
付農業戸數

昭和五年末現在
農業戸數一戸
當耕地面積

臺 朝 樺 關 北
灣 東 州 海
道 州 太 鮮 灣

農業戸數	四一、三七七	四九、三
總戸數百に付農業戸數	二、八六九、九五七	七五・一
	九、五七〇	一六・七
	六二、四九五	二九・〇
	一八三、八四〇	四〇・一
昭和五年末現在農業戸數一戸當耕地面積	二・〇町	四・五
	一・五	
	二・九	
	三・三	
	四・五	

内地府縣

五、三九一、七四三

四五・九

〇・九

樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は拓務省統計概要に依る。

朝鮮は同廳統計書に依る。

北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

二 耕地面積

本島の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は八十一萬町步(八十四萬甲)にして内、田三十九萬町步(四十萬甲)、畑四十一萬町步(四十二萬甲)なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地面積の割合最も大なるは、關東州にして本島之に亞ぎ、朝鮮は第三位を占め樺太最も小なり。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

耕地面積(町)

%

昭和五年末現在

臺 朝 樺 關
灣 東 州
道 州 太 鮮 灣

總數	八八、八八二	三九、九七四	四一、八九七
田	四三、八八六	一、六一七、六九五	二、七七〇、九六九
畑	二七、九九七	—	二七、九九七
昭和五年末現在	二〇五、五三二	九五四	二〇四、五七八
%	—	—	—
	〇・五	—	九九・五
	—	—	—
	—	—	—
	—	—	—
	—	—	—

北海道 八二八、六八六 一九〇、九四一 六二七、七四五 二三三 七六・七
 内地府縣 五、〇七八、七八〇 三、〇〇一、五七九 一、七〇七、一〇一 五九・一 四〇・九
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は拓務省統計概要に依る。
 北海道、内地府縣は第六次農林省統計表に依る。

三 農 産

本島の農産物は、昭和五年中の總生産價額貳億貳千參百萬圓にして内、普通作物一億二千六百萬圓、特用作物七千六百萬圓、園藝作物貳千壹百萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は壹億七百萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は六千七百萬圓を以て之に亞ぎ、甘藷の壹千八百萬圓、蔬菜類の壹千萬圓、バナナの五百四萬圓、粗製茶の四百萬圓、鳳梨の貳百七拾萬圓、落花生の貳百拾萬圓、柑橘の百四拾萬圓、豆類の百萬圓等順次之に亞ぐ。

總 普通作物	米 (玄米)	甘 藷	豆 類
生産價額	一、〇七、一八八、七〇五	一、七、八三四、五四二	一、〇一、一四七、一
% (生産價額)	四八・〇	八・〇	〇・五
作付面積	六三二、九〇三	一、二九、〇六二	一九、〇五五
收穫高	七、三七〇、五一六石	二、二一六、五四斤	七三、九五二石

小 其 他	甘 蔗	粗 製 茶	落 花 生	煙 草	黃 麻	苧 麻	香 花	其 他	園 藝 作 物	柑 橘	龍 眼	橫 濱	
生産價額	三、九八、五三三	七、五七九、二八一	六、七、〇五三、六九〇	三、八〇三、六一五	二、〇五、一、九二	九三〇、七五〇	五七八、六七五	五一六、九七五	一、六六、五八三	七二、七七七	二、三八、四七〇	一、三〇、三五〇	三、六、二〇四
% (生産價額)	〇・二	三三・九	三〇・〇	一・七	〇・九	〇・四	〇・三	〇・二	〇・一	〇	〇・一	〇・三	〇・六
作付面積	四一三	一、〇九三、九七	四七、〇六九	二七、五四〇	八四五	二、五五九	一、七九〇	三、三四五	五八六	三、一四	二、九八	?	?
收穫高	二、七九六石	一一、六一八、三五九斤	一、七、四〇六、八六七斤	四六五、二〇八石	二、五〇六、六二六斤	六、四八二、四三九斤	一、九六五、三六一斤	一〇、三二九石	?	?	一、七三八、七四九斤	二、四九九、一二九斤	二、二六、七七九、六〇五斤

一〇 青 菜

其蔬李機鳳
 の
 蕪他菜 仔梨

二、六五七、五七二
 二〇九、七九一
 一六一、五〇四
 一〇、二四〇、五四一
 四五五、一八九
 六五、六四二

〇
 〇・二
 四六
 〇・一
 〇・一
 一・二

五、二四八
 五七三
 六四四
 ?
 五七四

六九、〇三四・二八七
 七、〇四三、七八八
 九、四七三、九四八
 ?
 ?
 二、五四四石

其蔬李機鳳
 の
 蕪他菜 仔梨

二、六五七、五七二
 二〇九、七九一
 一六一、五〇四
 一〇、二四〇、五四一
 四五五、一八九
 六五、六四二

〇
 〇・二
 四六
 〇・一
 〇・一
 一・二

五、二四八
 五七三
 六四四
 ?
 五七四

六九、〇三四・二八七
 七、〇四三、七八八
 九、四七三、九四八
 ?
 ?
 二、五四四石

10 畜 産

本島の畜産物生産總價額は、昭和五年に參千萬圓を算し内、家畜生産貳千四百萬圓、家禽生産四百七拾萬圓、牛乳五拾萬圓なり。
 家畜生産中、豚は貳千貳百萬圓を以て第一位を占め、水牛の千五百萬圓之に亞ぐ。家禽生産中第一位を占むるは鶏の參百五拾萬圓なり。

家畜	生産價額	% (生産價額)
總 家畜	二九,五九,四七七	100.0
水牛	二四,四〇,三〇八	八二.四
黄牛	一,五四五,三六九	五.二
雑種牛	四四一,六一七	一.五
其他の牛	一四七,一一〇	〇.五
豚	三六,三七一	〇.一
山羊	三三,〇三八,六四一	七四.五
其他	一九一,〇八三	〇.六
鶏	一〇,一〇七	〇
鷺	四,六九三,一五五	一五.九
鷓鴣	三,四九六,四七一	一一.八
鷓鴣	八八六,九五三	三.〇

鷺 七 鷺
 面 七
 鳥 七
 乳 牛

鷺	二八五,五〇七	一.〇
鷺	二四,三三四	〇.一
鷺	四九六,〇二四	一.七

愛製薯籐龍蓮籐筍木竹薪用 **總**

腦 玉 原 (竹 眼) 子料椰皮肉草 炭材材材額

八、一〇八	二五、七四一	二六、〇二七	四〇、六九〇	三八〇、一七二	五〇、五九六	三二、一七九	四八七、九二四	一、〇四七、七八九	一、五一六、五七四	二、六七七、九二〇	五、〇三三、〇七三	一一、八四七、四三三
1.0	0.2	0.2	0.3	3.2	0.4	0.3	4.1	8.8	12.8	23.6	42.4	100.0

本島の林産物生産總價額は、昭和五年に壹千貳百萬圓を算し内、用材の五百萬圓第一位を占め、薪材の參百萬圓、竹材の百五十萬圓、木炭の百萬圓、筍の五拾萬圓等順次之に亞ぐ。

一一 林 産

其月班姜

の芝

他桃綿黃

一四、五四五
六、三七二
一七、八二八
四九一、八九五

四・二
〇・二
〇・一
〇・一

一二 鑛業

本島の鑛産總價額は、昭和五年に壹千五百萬圓を算し内、石炭は總價額の六割四分、即ち壹千萬圓を以て第一位を占め、金銅鑛は參百五拾萬圓、金の六拾萬圓、石油の四拾萬圓等順次に亞ぐ。

品名	産額	價額	% (價額)
石炭	一、五九八、七二八噸	二五、三三、七三三	100.0
石油	一二七、四六九噸	九、六一三、四一六	六三.六
石油	一九二、四四八噸	六三六、四八九	四.二
沈澱	四九、一五七石	一五四、七九九	一.〇
石油	三五、二五三、二五	三八一、三〇四	二.五
銅鑛	八三八、三九六斤	三、四五七、一八七	二二.八
硫黃	一二五、七六三噸	三三、二二七	〇.二
銀	二、五六三噸	一〇、七九〇	〇.一
砂金	四六、八五六石	九、四二二	〇.一
揮發油	三三三、二五八	七六〇、七二九	五.〇
鑛油		八一、四〇一	〇.五
總額			

一三 水 産

本島の水産總價額は、昭和五年には壹千七百九拾萬圓を算し内、水産漁獲物壹千八百八拾萬圓、養殖場漁獲物參百拾萬圓、水産製造物百八拾萬圓、製鹽壹百萬圓なり。
 更に之を品目別に觀れば、虱目魚の貳百萬圓第一位を占め、鯛の百八拾萬圓、鮪の八拾萬圓、鱧の六拾八萬圓、鯉の六拾萬圓等順次之に亞ぐ。

總水産漁獲物	數	價額	%
鯛	一、七八八、八一〇	一七、九三五、四二四	100.0
鯉	六二六、七六八	二、七七一、二四四	15.7
鱧	五三一、八一	一、七八八、八一〇	10.0
鰻	六八一、四七四	六二六、七六八	3.5
鱈	二二二、四三〇	五三一、八一	3.0
鮪	三二八、六六四	六八一、四七四	3.8
鯖	八二八、九五三	二二二、四三〇	1.3
鮪	五七九、七四六	三二八、六六四	1.8
黃花魚	二五六、三五八	八二八、九五三	4.6

養殖場漁獲物	數	價額	%
虱目魚	二、〇〇〇、五八八	三、二四、九八一	17.5
草魚	一七二、三二五	二、〇〇〇、五八八	11.1
草魚仔	一六六、九九七	一七二、三二五	1.0
烏魚	四九四、八〇一	一六六、九九七	0.9
烏魚	一一一、四七	四九四、八〇一	2.8
烏魚	九七、三二七	一一一、四七	0.6

狗母	三一四、七二〇	一・八
鯖	一二四、五五九	〇・七
鮫	五〇、〇〇五	〇・三
太刀魚	九七、〇七八	〇・五
文魚	五八、五七二	〇・三
蝦	七七、五二五	〇・四
烏賊	一七三、八三五	一・〇
珊瑚	三三〇、三九二	一・八
其他	三七〇、四六七	二・一
其他	四、三二八、九七七	二四・二

製	其	乾	鱈	鰾	蒲	煮	鯉	水産製造物	其
	の					干	節		の
鹽	他	蝦	鱈	仔	鉾	鱈	節		他

1,318,016	255,313	18,506	227,708	72,677	200,146	357,717	671,206	1,793,273	98,796
-----------	---------	--------	---------	--------	---------	---------	---------	-----------	--------

六八	一五	〇一	一三	〇四	一一	二〇	三七	一〇〇	〇六
----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----

一四工業

本島の工業生産總價額は、昭和五年に貳億參千貳百萬圓を算し内、砂糖の壹億五千四百萬圓は群を抜いて第一位を占め、再製茶の壹千萬圓、鐵工の六百萬圓、木製品の四百七拾萬圓、酒精の參百八拾五萬圓、煉瓦及瓦の參百參拾萬圓、肥料の參百貳拾萬圓等順次之に亞ぐ。

生産價額	%
總額	100.0
砂糖(稅拔)	66.2
酒精(稅拔)	17.1
再製茶	4.3
原動機及其の附屬機械類其他	1.6
木製品	2.0
セメント	1.4
染色	0.3
麵類	1.0
鐵工類	2.6
肥料	1.4

金銀細工	2,432,283	1.0
味噌及醬油	2,728,425	1.2
植物油	2,116,147	0.9
植物性油	3,310,096	1.4
及同類	1,393,084	0.6
煉瓦及瓦類	2,016,645	0.9
金銀紙	1,395,741	0.6
製粉	110,118	0.1
織物	2,766,403	1.2
糖(稅拔)	1,084,646	0.5
帽子	1,510,216	0.7
製氷	1,363,313	0.6
竹細工	3,291,401	1.4
鳳梨罐詰	878,413	0.4
鳳梨罐	691,713	0.3
紙磁器	3,013,214	1.3
陶磁器	1,196,263	0.5

一五 糖 業

本島の糖業は領事當時八、九千萬斤の粗糖を製産するに過ぎず其の栽培製糖共に幼稚にして、需要の四分の三は海外の供給に俟つ状態に在りき。是に於て、糖政の確立、糖業奨励規則の制定、原料採取區域の限定、蔗苗取締規則の制定其他諸種の糖業研究機關の設置等に依り顯著なる發展をなせり、明治三十五年期に於ては八千二百六十萬斤を産するに過ぎざりしが大正十年期には四億二千萬斤、即ち約五倍の増産を見るに至り、昭和六年期に於ては、公稱資本金貳億五千餘萬圓、作業工場數百三十一、作業能力四萬五千噸を有し、其の製糖高十三億三千萬斤に達す。内新式製糖會社の數は十一にして作業工場數四十六、作業能力四萬三千噸を有し、その製糖高十三億一千萬斤を算するに至れり。

總數	公稱資本金	作業工場數	作業能力	製糖高	% (製糖高)
新式製糖會社	二五〇、六三九 <small>千円</small>	三三	四四、八八八 <small>噸</small>	一、三三八、七九八、六四四 <small>斤</small>	一〇〇〇
臺灣製糖	二四〇、七七七	四六	四三、五三八	一、三二一、八〇五、四二七	九八七
新興製糖	六三、〇〇〇	一三	二一、八一四	三五四、七八二、九九五	二六七
明治製糖	一、二〇〇	一	五六〇	一七、三三五、三九〇	一三
大日本製糖	四八、〇〇〇	七	八、五二〇	二四七、七三三、一六八	一八六
鹽水港製糖	五二、四一七	六	七、六三八	二五三、八四五、九〇四	一九一
	二九、二五〇	六	五、八八〇	一八一、〇六八、二七〇	三三六

新高製糖	二八、〇〇〇	三	三、二八四	七、二四四、五〇九	五四
帝國製糖	一八、〇〇〇	五	三、二五四	一三三、〇二、八一六	一〇〇
昭和製糖	三、二六〇	二	一、三一〇	二九、〇八九、九八七	二二
臺東製糖	一、七五〇	一	三九二	一〇、二九七、八八八	〇八
新竹製糖	一、二〇〇	一	五六〇	八、二四、一五〇	〇六
沙撈越製糖	七〇〇	一	三三六	五、二八〇、三五〇	〇四

改良糖廊	四、八三二	七	五八〇	九、五三四、八五八	〇七
舊式糖廊	?	六	七八〇	七、四三八、三八九	〇六

昭和六年期とは昭和五年十一月より同六年十月に至る期間を謂ふ。

一六 貿易

一 貿易總覽

本島の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間)の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の參千壹百萬圓より大正元年の壹億貳千五百萬圓に進みたり。大正二、三の兩年砂糖の減産と一般商況不振の爲め少しく減退したるも、大正六年には貳億圓臺に上り、大正八年には更に參億圓臺を突破し、大正十年及十一年は再び一般商業界に産業界停滯沈靜を極めし爲め、貳億八千萬圓に減退せるも大正十二年には復た參億圓臺に上り、大正十四年には四億四千九百萬圓に上れり。昭和元年は内地貿易衰退に主因して低下し、翌二年は内地未曾有の混亂に達著せるも内臺貿易には大なる影響なかりしもの、如し。昭和三年には支那の日貨排斥に達ひ同五年は銀價暴落と外米輸入制限の影響を受けしも砂糖、芭蕉實及び礫石の出増に依りて量的には増加を示し、四億壹千萬圓に達し、人口一人當百拾貳圓を算せり。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに、内地貿易は常に過半數を占め少きも七割、多きは八割に達す。内地と本島とが國家經濟の見地よりして益々密接不離の有機的關係裡にあり愈々其の重要性を増大しつゝ、あるは明白なる事實なり。

(イ) 貿易總表

年	總額	指數	外國貿易	内地貿易	外國貿易 %	内地貿易 %	一人當
大正一年	1,254,424	100	342,267	911,157	27.3	72.7	37.4
二年	1,142,248	92	309,966	832,282	27.1	72.9	33.4
三年	1,116,633	89	259,996	856,637	23.3	76.7	32.2
四年	1,190,333	103	282,212	908,121	23.9	76.1	37.0
五年	1,777,370	142	477,083	1,300,287	26.5	73.5	50.5
六年	2,346,691	187	613,315	1,733,376	26.1	73.9	65.9
七年	2,435,576	194	669,949	1,765,627	27.5	72.5	68.0
八年	3,322,536	265	997,755	2,324,781	30.0	70.0	91.6
九年	3,887,702	310	955,540	2,932,162	24.6	75.4	105.8
十年	2,863,933	228	639,975	2,223,958	22.3	77.7	76.3
同	2,769,960	221	674,845	2,095,115	24.4	75.6	72.5
同	3,087,724	246	682,264	2,405,460	22.1	77.9	79.3
同	3,867,700	308	890,000	2,977,700	23.0	77.0	97.7
同	4,496,610	358	1,044,555	3,452,055	23.2	76.8	107.7

三 中華民國、香港及南洋貿易

本島の外國貿易中本島と最も密接なる關係を有する中華民國、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、現世界狀勢より見て益々其の重要性を加へつゝあり。即ち昭和五年に就きて觀るに、輸出額は壹千八百萬圓にして、輸出貿易總額の約七割七分を占め、輸入貿易は貳千八百萬圓にして、輸入貿易總額の六割に當れり。

(イ) 輸 出 (千圓)

總額	中華民國	香港	南洋
昭和五年	一七五〇一	一〇、一〇四	三、〇三二
同四年	二六、三〇八	一七、六九〇	四、一六六
同三年	二五、二七〇	一五、三〇一	五、〇七六
同二年	三六、二〇六	二四、七九一	六、〇八三
同元年	四〇、二八一	二九、七六〇	四、四五八
大正十四年	三七、六〇八	二六、三四七	五、〇四四
同元年	五、一四八	四、二六四	三九三
總額	一七五〇一	一〇、一〇四	三、〇三二
中華民國	一〇、一〇四	一七、六九〇	四、一六六
香港	三、〇三二	四、一六六	五、〇七六
南洋	四、三六五	四、五〇一	四、七六〇

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度支那、暹羅及濠太刺利を謂ふ。以下亦同じ。

(ロ) 輸 入 (千圓)

總額	中華民國	香港	南洋
昭和五年	二七、九四四	四、四三二	三、七六六
同四年	四、四三二	三、七六六	四、五〇一
同三年	三、七六六	四、五〇一	四、七六〇
同二年	四、五〇一	四、七六〇	五、三三二
同元年	四、七六〇	五、三三二	六、〇六三
大正十四年	三、七六六	四、五〇一	四、七六〇
同元年	四、五〇一	五、三三二	六、〇六三

外國貿易總額に對する割合

大正	同	同	同	同	同	昭和	同
〇年	一	二	二	三	一	一	二
輸出	輸出	輸出	輸出	輸出	輸出	輸出	輸出
輸入	輸入	輸入	輸入	輸入	輸入	輸入	輸入
總額	中華民國	香港	南洋	總額	中華民國	香港	南洋
七九七	三九〇	一九四	二一三	七九七	三九〇	一九四	二一三
七七一	四八一	〇三	三三七	七七一	四八一	〇三	三三七
六四四	三三七	一四一	一六六	六四四	三三七	一四一	一六六
六〇六	四九四	〇二	一五〇	六〇六	四九四	〇二	一五〇
六七八	三六一	一四三	一七四	六七八	三六一	一四三	一七四
七四五	四四八	〇二	一七四	七四五	四四八	〇二	一七四
七九四	五二〇	一三五	一四〇	七九四	五二〇	一三五	一四〇
七〇三	五六七	〇二	一六八	七〇三	五六七	〇二	一六八
七三七	五〇九	一〇五	一三〇	七三七	五〇九	一〇五	一三〇
八七	五四一	〇二	一六〇	八七	五四一	〇二	一六〇
八七	五〇四	九〇	一二三	八七	五〇四	九〇	一二三
七五	四三八	〇一	二九六	七五	四三八	〇一	二九六
八二	六〇四	〇一	二二〇	八二	六〇四	〇一	二二〇
八二	五五六	一三六	三四二	八二	五五六	一三六	三四二
六九	三四八	〇二	三〇二	六九	三四八	〇二	三〇二

(ハ) 比 例

中華民國	香港	南洋
二、六六〇	七〇	五、二二四
二、九七三	七四	一、五七三
二、七〇八	八八	一〇、五五三
二、九二八	一〇二	二、三五九
二、七二七	四六	一、八三三
三、〇五二	一〇七	九、〇一六
六、七六七	一一九	三、〇五六

中華民國、香港、南洋貿易總額に對する百分比例

同	昭	同	同	同	同	大	同	同	同
和						正			
	一	一	二	二	一	一〇年	五	四	三
	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪	輪
	入	出	入	出	入	出	入	出	入
	出	入	出	入	出	入	出	入	出
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
五〇三	六八五	五九七	七三八	七七一	六五四	七二七	五三三	七六五	六六八
〇二	一六八	〇一	一一一	〇三	一七〇	〇四	二二一	〇三	二二九
四九五	一四七	四〇二	一五一	二二八	一七六	二七九	二五八	二三八	二六七

四 重要品別外國貿易

同	同	同
五	四	三
輪	輪	輪
入	出	入
出	入	出
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
八二〇	五七八	六五三
〇三	一七三	〇二
一八七	二五九	三四七

本島の外國貿易中輸出品の主なるものは、茶、石炭、砂糖、樟腦、酒精等なり。今昭和五年に就きて之を觀るに、茶は八百七拾萬圓を以て第一位を占め、石炭の貳百九拾萬圓、酒精の壹百五拾萬圓、樟腦の百拾萬圓等順次之に亞ぐ。

次に輸入品の主要なるものは、豆油粕、米、杉材及杉板、硫酸アンモニウム、ガンニール、石油、大豆等にして、昭和五年には豆油粕の壹千參拾萬圓第一位を占め、硫酸アンモニウムの七百九拾萬圓、大豆の貳百七拾萬圓、ガンニールの貳百四拾萬圓、杉材及杉板の百四拾萬圓、小麥の百拾萬圓等順次之に亞ぐ。

(イ) 輸 出 (千圓)

茶	昭和五年	同四年	同三年	同二年	同元年	大正十四年	同元年
	八、六九二	九、三七一	九、九二二	一一、六四五	一二、三四五	一一、四七六	六、六七四

燐寸	九〇七	一三七八	一四七八	一、二九六	一、〇九五	一、五六六	四八二
紙粉	三、二五五	三、五六七	三、二三七	二、九九〇	三、〇六六	三、四二二	八三八
小麥	二、三五四	三、一二六	二、九八五	二、九八四	三、四四〇	三、九三六	一、六九〇
綿絲	一、一四一	一、五三一	一、二五七	一、三一九	一、六四二	一、六七〇	一六六
毛織物	一、三六八	二、〇〇六	一、三六八	一、二二一	一、三四四	一、〇一九	三四七
メリヤス肌衣(各種)	一、二〇六	一、四一八	一、二〇三	一、七八七	一、五〇九	一、六六五	一九四
砂糖	一、〇八三	八五五	一、二四五	一、二二七	一、一九〇	九九〇	八七九
砂	一、四二四	一、七八六	一、七八二	一、三〇二	九五五	七八〇	三七五
松材及松板							

六 港別貿易

昭和五年に於ける本島の輸移出入貿易総額は四億圓にして之を港別に觀るに、基隆の壹億九千六百萬圓第一位を占め、總額の約五割に當り、高雄の壹億九千萬圓之に亞ぎ四割七分を占め、安平の壹千壹百萬圓、淡水の參百萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の七分を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港と比較するに、基隆は神戸、横濱、大阪、大連に亞ぎ第五位を占め、高雄は第六位を占め基隆に亞ぎ、更に安平は新潟、博多の中間に、淡水は博多に亞ぎ那覇の上位にあり。

神戶	一、〇八六、八二二	五三三、一七二	五六三、六四九
横濱	八四二、六七六	四四九、八三八	三九二、八三八
大連	五三〇、六六四	二九九、三一九	二三一、三四五
大隆	三九五、〇一一	二二六、二六二	一六八、七五九
基隆	一九六、〇一八	九三、〇八九	一〇一、九二九
高雄	一九〇、八〇四	一四〇、三三三	五〇、五七三
釜山	一九〇、六九七	八二、二五五	一〇八、四四二
仁川	一一二、二九八	四二、二五八	七〇、〇四〇
平壤	一七、三二四	三、四八五	一三、八二八
新潟	一一、二六三	五四八	一〇、七一五
安平	一一、〇〇七	五七一	一〇、四三六
博多	五、三六三	一四一	五、一一三
淡水	二、八七四	五五〇	二、三三四
那覇	三、二八八	二二	三、二六七
總額			

本島及朝鮮の輸出入中には各移出入を含む。朝鮮、關東州は同廳統計書に依る。北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

一七 財政

臺灣總督府特別會計は明治三十年度を以て開始されしも同三十八年度よりは全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至れり。爾來母國會計に對し或は關稅の一半を繰入れ、或は内地に於て消費する砂糖に對する消費稅の全部を提供する等母國財政に多大の貢獻を爲しつゝある。今其の趨勢を窺ふに明治三十八年度の歳入は僅かに貳千五百萬圓に過ぎざりしが、爾來年と共に其の額を増大し、大正八年度には壹億圓を突破し、同九年度には壹億壹千九百萬圓に増額せしが、同十年度より同十三年度迄は五百萬圓内外の減少をなせるも、同十四年度には壹億貳千萬圓に達し、尙昭和元年度には壹億參千萬圓に増額し、同五年度には世界的不況とデフレーション政策の爲め加之合理化の波高く事業縮小、失業者の増加其の他諸多の國際的、國內的因由に依り壹億參千萬圓となり、之を前年度に比すれば貳千萬圓の減少を示せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは、官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多小の高低あるを免れざるも少きも三割九分、多きは六割を超へ昭和五年度に於ては六割六分に達せり。

歳出は明治三十八年度の貳千萬圓より、大正八年度の七千貳百萬圓に増加し、更に同十一年度には九千六百萬圓に増額せり。同十二年度以降は八千萬圓臺に減退したりしも昭和元年度には再び九千萬圓臺に増額し、同五年度には壹億壹千萬圓に達せり。

一八 專 賣

本島の專賣は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、阿片は明治二十九年三月製藥所に、食鹽は同三十二年五月鹽務所に、樟腦は同年八月樟腦局に於て開始せり。然るに同三十四年六月に至り之を專賣局に統一し同三十八年には煙草を、大正十一年七月には更に酒を加へて現在に至れり。最近十九箇年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度には壹千七百萬圓なりしが、同六年度には貳千萬圓を超へ、更に同九年度には參千萬圓を突破したるも、同十年度には世界的經濟界不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の壹千萬圓より五百萬圓に激減したる爲め、總額に於て貳千五百萬圓に低下せしが、同十一年度には稍や景況を回復したるを、酒專賣實施の結果總額參千四百萬圓に達し、同十二年度には四千萬圓を突破し、同十四年度には四千五百萬圓に増加せり。

最近人造樟腦の需用旺盛となり其の對策上樟腦に關する事項は一般に公表せざるに依り、昭和元年度以後の賣渡總價額には樟腦に關するものを控除せる爲め、大正十四年度に比し激減せるも、各種類別に之を觀れば阿片烟膏を除くの外は概ね増收の趨勢に在りさ謂ふべし。

年度	賣渡總價額	阿片烟膏	食鹽
大正一	一七、〇九六、九二一	六、〇二七、八三八	七、四七、九三二
同二	一六、四九七、五〇〇	五、八八六、四〇〇	八〇八、九二二
同三	一六、三六一、八三三	五、六八三、八六四	八九六、四六九

同同同同 昭同同同同 同同同同同 同同
和
一 一 一 一 一
五 四 三 二 一 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四

一六,五二一,七三四	一九,五九七,九二一	二一,〇三三,七〇二	二二,六六三,三四五	二七,四三三,三六一	三二,九七三,八三五	三五,四四二,〇〇六	三六,六五三,五六二	四〇,三三七,一五五	四二,八二一,四九二	四五,三五六,二三四	四九,九〇九,二五三	三六,三六四,八四三	三七,七四五,五九七	三七,六九六,八五四	三六,〇四六,八三九	五,八〇〇,七二四	六,五九〇,一五三	六,九二四,三七七	七,五五二,二四五	七,六一九,四二二	七,七〇八,三三五	六,七七二,六一四	六,二八三,二七七	五,六四〇,六六五	五,一八四,〇三六	四,九二一,六六八	四,七二六,五七六	四,三七五,七十四	四,一〇三,一九一	三,七五〇,七九六	四,二六六,一四〇	八七三,九七八	九五二,九三五	一,一八〇,四六五	一,〇九三,二〇五	九九七,〇八五	九七三,七七八	一,七五三,六七七	一,八一〇,三〇七	二,三八二,八三二	二,八三八,二八一	二,四六五,六四九	二,一七二,八七六	二,二二五,九四七	二,〇九一,二七〇	二,五〇〇,四七四	二,三三四,二二一
------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	---------	---------	-----------	-----------	---------	---------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

同 昭同同同同 同同同同同 同同同同大
和
一 一 一 一 一
二 一 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一 年度

樟腦及樟腦油	煙草	酒	指數
五,七九七,三〇七	四,五二三,八三四	六,五四〇,六九二	一〇〇
五,〇八三,〇七九	四,七一九,一〇九	八,一三三,五二九	九六
五,三三二,〇五七	四,五四九,四三二	一一,六七七,七三三	九六
五,一六八,七六三	四,六六八,二六九	一三,三三四,二六六	九七
六,七三八,五八四	五,三一六,二四九	一四,〇一五,二六四	九五
七,一一九,五二七	五,八一,三四三	一四,七七七,四九七	二二
七,〇四〇,九九七	六,九七五,八九八		二二
九,一一五,三一〇	九,七〇九,五五四		二二
一一,八四〇,二九〇	一一,二二七,五三二		二二
五,二五六,七一六	一一,六五八,九九九		二二
九,二七二,九九七	一〇,七四六,二八九		二二
一三,三一四,九八五	一〇,七五五,一四四		二二
一一,〇七九,八七二	一一,〇三一,五七〇		二二
一二,〇七八,四二七	一二,四五六,一五四		二二
?	一四,〇〇四,五三六		二二
?	一四,九九五,六二五		二二

同 同 同

樟腦及樟腦油には副産物を含む。

五 四 三

? ? ?

一五、八七二、三五九
一六、二七五、九一六
一五、七三二、七四六

一五、六七八、七七七
一五、二六九、六六八
一三、七三三、八三二

三三二
三三〇
三二六

一九 金融
一 貨幣

領臺當時に於ては幣制混沌とし、商取引、經濟、産業は甚しき混亂狀勢にありて弊害百出し制度の改正統一の急なるものあり。
 政府は本島の舊慣及び中華民國との貿易關係に鑑み諸種の施設をなせしも目的を達し得ず、明治三十七年六月臺灣銀行に對し、金券發行を許可せり、然れども同四十年に至り對岸より銀貨の輸入激増し再び幣制を紊すの慮を生じたりしかば翌四十一年十月、此に對する諸種の方策を施し、同四十四年四月を以て貨幣法を施行せり。
 爾來本島の幣制は全く内地と同一の制度下に統一され多年の懸案も解決するに至れり。

二 銀行

本島は領臺當時銀行と稱すべきものは未だ存在せざりしも、政府の金融政策に對する努力と一般産業の發展と各種商業の殷盛と相俟つて現下の盛況を結果するに至れり。昭和五年末現在に於ける狀勢を見るに銀行數七(日本勸業銀行及三十四銀行は支店)にして、島内に於ける支店及出張所總數六十三、資本金貳千八百三拾萬圓(拂込金貳千壹百萬圓)、準備金八拾四萬圓、純益金壹百拾萬圓、島内預金壹億參千六百餘萬圓、同貸出金參億七千五百萬圓なり。

總數	支店 出張所	公稱 資本金 千円	準備金 千円	純益金 千円	年末現在(千圓)	
					島内預金	島内貸出金
臺灣銀行	一四	一五、〇〇〇	四一四	四四五	七三、六六一	二五九、六二九
日本勸業銀行	二	—	—	—	—	—
臺灣支店	—	—	—	—	—	—
華南銀行	一	二五、〇〇〇	—	—	—	—
臺灣商工銀行	二七	五、〇〇〇	—	—	—	—
彰化銀行	一四	四八、〇〇〇	三九三	一六四	一一、七三五	一一、〇七七
臺灣貯蓄銀行	三	一、〇〇〇	三三	三	七、六一五	一一、六〇一
三十四銀行	三	—	—	—	—	—
臺灣支店	—	—	—	—	—	—
總數	三三	二八、〇〇〇	八三九	一二三	三六、四三三	三七四、八八五

三 其の他の金融機關

昭和五年末現在(金額千圓)

組合數	出資金	貯金	準備金	各種積立金	貸付金
市街庄信用組合	二	二、九五七	一一、七七七	一、五〇七	—
農村信用組合	三六五	一一、三〇七	二二、八三九	—	—
及事業組合	—	—	—	—	—
無盡業	—	—	—	—	—
營業所數	—	—	—	—	—
出資金	—	—	—	—	—
給付契約高	—	—	—	—	—
掛金契約高	—	—	—	—	—

昭和五年度(金額千圓)

公設質舖	三	貸出金	件數	金額	件數	金額
低利資金	三	貸出金	一八四、三〇五	二、三三二	一四一、八〇五	一、八八八

之は本島郵便貯金の中央政府に集積されしものを、日本勸業銀行を通じて本島に融通決定を得たる資金にして、其の貸出に付ては大藏省の承認を得る規程に基き總督府が相當と認めたる方面に、勸業銀行をして貸出さしむるものにして主なる貸付先は、公共團體産業組合の事業資金、住宅資金、水利組合事業資金及公設質舖資金なり。而して其の貸出回數及金額を掲ぐれば次の如し。

總數	大正六年	同八年	同十年	昭和十一年	昭和十二年	同三年
貸出金額(千圓)	一、七〇〇	一、〇〇〇	一、一五〇	一、〇〇〇	一、三〇〇	二、〇〇〇

同五年 四物價 三〇〇

本島の物價は世界大戰の影響を受くること比較的少かりしも、戦局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、同九年にはその絶頂に達したりしが、我國戦時好況の餘波を受けて、生産過剰と大衆購買力の減退の爲め不況の嵐下に置かれるに至り、同十年以降は低落歩調を辿り、同十三年に於て一時的少康を見たりと雖も世界的不況、銀價暴落、其の他諸種の原因に依り益々其の歩調を強め最近に至りては世界恐慌及農産物生産過剰加之世界列強の關稅戰、日支事變其の他國際的國內的諸種の因由に依り益々不況の底邊を走り、金再禁に依りても其の影響なく、世界的波動は靜止する處を不知物價は不矯益々下行線上进行するもの、如し、即ち臺北市に於ける最近十九箇年の主要生活必需品の物價指數は最も克明にその趨勢を示せるもの、如し。

大正	一年	二年	三年	四年	五年
白米(在來)	100	93	76	58	65
甘藷(赤)	100	95	81	72	66
米(太)	100	95	92	79	83
醬(内地)	100	100	100	100	100
牛(黃)	100	92	114	89	91
豚肉	100	105	93	79	84
木炭	100	103	101	88	107
薪	100	117	117	92	115

同同同同昭同同同同同同同同同

和

一一一一一

五四三二一四三二一〇九八七六

一二五 一四五 一三六 一三七 一五七 一六三 一四六 二一〇 二二七 二二二 一六一 一七九 一三八 九四

一三四 二九五 二五二 二六二 二三九 二三〇 一九二 二二一 一八一 一四六 一八七 一九三 一五六 九二

一二七 一三八 一三九 一四四 一五二 一四七 一四〇 一三一 一二六 一三九 一八五 一五九 一三〇 九八

一二八 一六五 一六九 一六九 一五四 一六六 一五一 一五一 一六一 一五六 一三六 一二三 一〇九

一七六 一九三 二〇三 二〇三 二二一 二〇三 二〇三 二〇二 二〇八 二二三 二六九 二四六 一三五 一二

一三二 一五二 一四二 一四八 一六八 一六六 一三五 一二六 一五二 一六一 二二八 一八八 一五三 九一

二五三 二八九 二九二 三〇〇 二九二 二九三 二七四 二五七 二七三 三一四 三三九 二七一 一六四 二四

二六五 二五〇 二七〇 二六二 二七五 二八三 二七八 二七二 二八〇 三一五 三三三 二八三 一七二 一四二

二〇 學 事

(一) 教育概覽

本島の教育は明治二十八年六月臺灣總督府の開廳せらるゝや、銳意教育に意を注ぎ異民族の教育に對しての多大なる研究と犠牲とを投與し、諸種の施設をなしたりしが大正八年一月勅令を以て臺灣教育令發布せられ本島人教育の基礎始めて整備せり。然れども此れは内地の學制とは全く別系統にして、主に本島に於ける當時の特殊事情に鑑みて制定せられたるものなりし爲め時勢の進運に伴ひ之が改善の必要を生じ、同十一年二月發布の臺灣教育令に依り、初等教育を除くの外は、悉く内臺人共學の制を採るに至れり。昭和五年度に初等教育機關たる小、公學校の八百九十一校、児童二十八萬三千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十三校、生徒一萬五百人、師範學校の四校、生徒千二百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林、農業、工業、商業學校の三十八校、生徒四千二百人、專門教育機關たる醫學專門學校、帝國大學附屬農林專門部、高等工業學校、高等商業學校の四校、生徒八百三十人、帝國大學一校、學生九十八人、私立各種學校十八校、生徒二千九百人、書房百六十四、生徒六千人あり。

次に初等教育機關を内地其他と比較するに、教員一人に對する小學校児童數は、北海道の四十六人最も多く、關東州の三十二人最も少く、我臺灣は三十九人を以て朝鮮、關東州の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂並に公立普通學堂児童の教員一人に對する割合は、朝鮮の四十九人最も多く、我臺灣は四十六人を以て之に亞ぎ、樺太は僅かに三十人を以て最下位に在り。

(イ) 教育機關 (昭和五年度)

學校數	教員數	學生、生徒 又は兒童數	教員一人に付學 生、生徒(兒童)
帝國大學	一二三 x二五	一八〇	一・三
醫學專門學校	四五 x一八	四五	七・二
帝國大學附屬 農林專門部	二三 x二七	九八	二・〇
高等商業學校	三三 x一七	二八二	五・六
高等學校	四五 x一四	一〇二	一〇・二
師範學校	一〇二 x六	一、一九〇	一・〇
中學校	二〇八 x一六	四、八三三	二二・〇

高等女學校	三	二二九	五、〇二二	二一〇
農林學校	二	四二	八四七	二〇・二
農業學校	一	二一	二四八	一三五
工業學校	一	六〇	六〇〇	一〇〇
商業學校	二	四八	一、〇五四	二〇・二
實業補習學校	三	七三	一、五二九	一〇・八
小學校	一三四	八七六	三四、一六三	三八六
公學校	七五七	五、四一一	二四八、四七八	四・五七
盲啞學校	二	一九	二五六	一三五
私立各種學校	一八	一四九	二八七二	一一・一
書房	一六四	二三四	五、九六四	二五・五
幼稚園	五九	二八(保姆)	三、六六九	二八・七

學校數(小、公學校は分教場を含む)は年度末現在、教員、學生、生徒(兒童)は三月一日現在なり。教員數中×は兼務者なり。

圖書館は官公私立合して六九館を算し藏書冊數二五萬冊を有し、貸付冊數九四萬冊、閱覽人員八〇萬人に達す。

(口) 内地其の他との初等教育比較

小學校	校數	教員數	兒童數	一校平均兒童	教員一人に付兒童
臺南	一三四	八八五	三〇、一六三	二五四九	三八六
朝鮮	四七〇	二、〇一八	六七、四〇一	一四三・四	三三・四
關東	二〇一	一、〇五六	四一、〇一五	二〇四・一	三八・八
北海道	五五	九一七	二九、六四二	五三八・九	三三・三
關東	一、七〇一	一〇、〇六四	四六三、一二一	二七二・三	四六・〇
内地府縣	三三、九〇五	二二九、一八二	九、二七、六一一	三八五・六	四二・一
臺南	七七	三、四三五	二四八、四七八	三三八・二	四五・七
朝鮮	一、八三一	九、四一八	四五九、四五七	二五〇・九	四八・八
樺太	六	八	二三六	三九・三	二九・五
關東	一五五	九〇六	三六、〇二六	二三二・四	三九・八

公學校に就て觀るに朝鮮は官公私立普通學校、樺太は土人教育所、關東州(州内)は

官立公學堂、公立普通學堂及諸學堂の事實なり。
 臺灣の就學兒童率は小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては本島人及蕃人(平地蕃)に就き算出す。
 公學校の關東州に在りては中華民國人のみに就き算出す。
 臺灣の兒童は昭和六年三月一日現在なり。
 朝鮮は昭和五年度末(兒童は昭和六年三月一日)現在にして拓務省統計概要に依る。
 樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は昭和五年末現在にして拓務省統計概要に依る。
 北海道、内地府縣は昭和三年度(兒童は昭和四年三月一日)現在にして帝國統計年鑑に依る。

二 社會教育

(イ) 社會教育團體 (昭和五年度)

國語講習所	一七八	(六年度)	一〇、一五三	(生徒)
國語普及會	一九四三	(五年度)	三〇、五九八	(修了者)
青年補習教育	三〇	(臺北州)	一二六二	(昭和六年度教習生)
	八四	(新竹州)	三、二七六	(同)

其の他の州廳に於ても各公學校を中心に卒業生指導講習會を開設し國語の習熟、職業知識の向上及び公民精神の涵養に努力しつゝあり。

青年團

團體數	六二六	青年團	四九四	女子青年團	一三三
團員數	三〇、九六九		二九、五〇七		五四六二
經費	八七、二五〇		七九、四〇八		七、七四六

(昭和六年四月末現在)

家長會及主婦會	總數	六〇八	家長會	三六九、三九七	主婦會	二八三
會數	八九二					一八四、九五六
會員數	五五四、三三三					

少年團及少年義勇團	團體數	二四	團員	一、〇八九	經費	四、〇八四
-----------	-----	----	----	-------	----	-------

- 社會教育統一團體
- 臺北聯合同風會
- 新竹州同光會
- 臺中州向陽會

臺南州共榮會

恩賜財團臺灣教化事業獎勵會

臺灣教育會

伊澤財團

三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの、數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙本島人千に對し僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

男女別本島人千に付

年	總數		平均	
	男	女	男	女
明治 三八年	一二、七〇	一〇、八〇一	三八	六八
大正 四	五〇、三三七	五〇、一四三	一六三	二九一
同 九	九九、〇五	八七、八九七	二六六	四九三

一、本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

二、昭和五年十月一日施行國勢調査の結果は目下調整中なり。

四 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの、數は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百四十二人五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

内地人千に付

年	總數		平均	
	男	女	男	女
明治 三八年	六、八八九	六、〇一〇	一一九・二	一七三・八
大正 四	一六、五九一	一三、四〇三	一一三・五	一七六・九
同 九	一七、二二三	一四、九六六	一〇五・二	一六一・六

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

醫生は明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄内に於て醫師を業と爲す者を謂ふ。
本表の外藥種商二千八百九十九名、製藥者二十名有り。

衛生上の調査機關

- 臺灣地方病及び傳染病調査委員會
- 臺灣中央衛生會
- 市區計畫委員會

檢疫機關

本島は對岸中華民國との交通極めて頻繁にして加之何れの交通も必ず船舶に俟つを以て來航船舶の檢疫を施行するが急務なりし爲め、之に意を注ぎ海港檢疫、獸疫檢疫を行ひ傳染病豫防に特別の施設をなせり。

二 水道

本島に於ける既設水道(簡易水道を含む)の總數は陸軍省所管に係るパロン、玉里(但し玉里庄へ給水の分は表中に含む)、卑南及總督府所管の恒春種畜支所等の消費水量不明のものを除き昭和五年末には六十五箇所、年末現在の給水専用栓戸數五萬五千四百五十二戸、共用栓戸數二萬五千五百十戸にして其の消費水量は消費水量不明のものを除き、計量供給約千二百三十三萬立方米、放任供給約二千九十八萬立方米なり。

年末現在

年中消費水量(立方米)

總數	水道數		總數	計量供給	放任供給
	專用栓戸數	共用栓戸數			
臺北州	三	二四、五二〇	三三、〇八三	三三、三九六	二〇、九七八
新竹州	七	二、八九一	九、七七一	七、九七六	一、七七五
臺南州	二	七、八二五	九、七七一	三、八一七	一、九七八
臺南州	六	一一、三五九	二、三五九	七、〇〇六	六、七二一
高雄州	七	六、二五七	七、二五七	一、二五三	六、〇三八
臺東廳	二	六、八三	五、四四二	一、六八〇	三、六六四
花蓮港廳	八	一、五四四	六、三七八	四、四〇五	四、八〇五
澎湖廳	一	三、七三	一〇、一五	三、一六九	三、一六九
總數			一〇、一五	一〇、一五	一

年中消費水量の臺東廳は臺東水道、花蓮港廳は花蓮港水道のみの事實なり。

三 ペスト及マラリア

本島は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衛生設備の完成と衛生思想の普及と共に、近年其の面目を一新し、ペストの如き大正七年以來全く之れが發生を見ざるに至れり。又マラリアの如きも其の流行盛にして死亡者多數に上りしが大正二年本病防遏の根本策を樹立しマラリア防遏規則を制定して以來銳意其の防遏に意を注ぎたる結果其の死亡數は年に

依りて増減ありき雖も、一般に減退の傾向を示し、明治三十九年に於て人口萬に付死亡數三十四人三分なりしが、昭和五年には六人二分に激減し、其の實數に於ても同年間に七割三分を減じたり。

明治三十九年
同 四〇
同 四一
同 四二
同 四三
同 四四
大正 一
同 二
同 三
同 四
同 五
同 六
同 七
同 八

死亡實數	ペスト	二、五三四
	マラリア	一〇、五六二
	ペスト	二、四四八
	マラリア	一一、七一五
	ペスト	一、〇六四
	マラリア	一一、七四〇
	ペスト	八五四
	マラリア	一〇、三三三
	ペスト	二五
	マラリア	九、一〇四
	ペスト	三六一
	マラリア	七、九四九
	ペスト	一八七
	マラリア	六、九〇九
ペスト	一二三	
マラリア	六、五七二	
ペスト	四九四	
マラリア	八、八八五	
ペスト	六四	
マラリア	一一、三四六	
ペスト	三	
マラリア	九、七二九	
ペスト	二	
マラリア	八、二九二	
ペスト	一	
マラリア	八、一〇六	

死亡實數

指數

人口萬に付死亡

同 九
同 〇
同 一
同 二
同 三
同 四
昭和 一
同 二
同 三
同 四
同 五

四 阿 片

(イ) 阿片制度

死亡實數	七、七六〇
指數	七
人口萬に付死亡	二・二
死亡實數	七、〇七〇
指數	六
人口萬に付死亡	一・八八
死亡實數	八、九一六
指數	七
人口萬に付死亡	二・三三
死亡實數	七、一六四
指數	六
人口萬に付死亡	一・八四
死亡實數	七、九三五
指數	七
人口萬に付死亡	二・〇一
死亡實數	六、五〇八
指數	五
人口萬に付死亡	一・六〇
死亡實數	五、七五八
指數	四
人口萬に付死亡	一・三九
死亡實數	五、〇八三
指數	四
人口萬に付死亡	一・二〇
死亡實數	四、三四六
指數	三
人口萬に付死亡	一・〇〇
死亡實數	四、〇二五
指數	二
人口萬に付死亡	九・〇
死亡實數	二、八四四
指數	一
人口萬に付死亡	六・二

阿片問題の解決は領事當時最も内外の注意を惹きしもの、一つなりしが政府は嚴禁主義を排し、漸禁主義を採用し其の所期の根絶を目して進めり、即ち、明治二十九年二月政府以外の輸入を禁止し、同三十年一月阿片令の公布あり、更に同年三月阿片令施行規則を發布し以て所期の目的に邁進せるも土匪各地に出没して法令の普及も容易ならざる状態なり

同同同同同昭同同
和

一 一
四 三
六 五 四 三 二 一

六五八
六〇四
五四八
四九三
四三六
三九六
三三一
二二三

六〇一
五五〇
四九六
四五二
三九九
三六一
二〇八
一九二

五七
五四
五二
四一
三七
三五
二三
二〇

同同同同同同同同同同同同同同同大
正 治

四 年
一 四
二 一 〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

七〇三
八七
九二〇
一,〇〇〇
一,一〇〇
一,二〇〇
一,三〇〇
一,四〇〇
一,五〇〇
一,六〇〇
一,七〇〇
一,八〇〇
一,九〇〇
二,〇〇〇
二,一〇〇
二,二〇〇
二,三〇〇
二,四〇〇
二,五〇〇
二,六〇〇
二,七〇〇
二,八〇〇
二,九〇〇
三,〇〇〇

九四七 男
九六四
一,〇二一
一,一五三
一,三二一
一,八二一
二,六七一
二,七三七
二,一三一
九二二
八一五
七三六
六四二

二六 女
二〇
二九
三三
三八
二八
一四八
二〇六
一八一
一〇八
九五
八一
六〇

りしが大正八年七月特許を廢止せり。
然し既特許者に限り特に大正九年より同十一年に至る三箇年間の特許猶豫を與へしが既
特許者にして退去廢烟の見込なく事情止むを得ざる者に對し尙當分の間其の特許を猶豫す
べき旨同十一年十二月二十四日を以て布告せり。

吸食特許者

總數

男

女

二二二 水利

本島に於ける埤圳の数は、七千九十六にして内、水利組合百七、公共埤圳二、認定外埤圳六千九百八十七なり。又其の灌漑排水面積は四十五萬五千甲にして内其の五割は水利組合の灌漑に屬す。

總	埤圳數	灌漑排水面積	% (灌漑排水面積)
水利組合	七、〇六	四、五、一六 ^甲	一〇〇.〇
公共埤圳	一〇七	二、三、一、五〇九	五〇.九
認定外埤圳	二	一、三、五、六二一	二九.八
		八、八、〇三九	一九.三

本表は昭和五年度末現在の事實なり。

二三 鐵道

本島の鐵道は領臺當時皆無狀態に在り。僅かに基隆、新竹間六十二哩の線路ありしも其の施設不完全なるのみならず當時殆んど破壊され使用に堪へざるものなりしなり。領臺以來鐵道政策の基礎を確立し著々其の歩は進められ、縱貫線の全通を見、次で幾多分支線の開通となり、更に東部鐵道の全通となりて今日の盛況を見るに至れり。

昭和五年度末には官設鐵道（阿里山及羅東森林鐵道を含む）の營業哩數六百二十哩に達し、外に私設鐵道一千四百哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして内、營業線は三百三十七哩なり。

今之を内地其他と比較するに、百方に里に付鐵道營業線の哩數は、關東州の二百八十八哩最も多く、内地道府縣の五十二哩、本島の四十一哩之に亞ぎ、樺太の十哩最も少し。更に人口萬に付哩數は樺太の十二哩最も多く、朝鮮は一哩にして最も少く、本島は二哩一分を以て内地の上に在り。

營業線路延長（哩）

	總數	官設	私設	百方に里に付	人口萬に付
臺朝	九七七	六〇〇	三三七	四二〇	三二
樺	二二九四	一七三四	六六〇	一六七	一一
太	三二八	二一〇	一一八	九九	二七

關東州
內地道府縣

六九九
一三八一六

八七七一

六九九
四〇四五

二八七六
五一七

五〇四
二〇

朝鮮、樺太、關東州(南滿鐵道)は昭和五年度末現在にして拓務省統計概要に依る。
內地道府縣は昭和四年度末現在の開業線哩にして帝國統計年鑑に依る。

二四 郵便、電信及電話

本島の遞信事業は軍政時代には總督府陸軍局に屬したりしが、明治二十九年四月より總督府民政局通信部の分掌となり。同三十四年十一月通信局の主掌となり。大正八年に遞信局と改稱され、同十三年十二月獨立の官制に依り交通局内の遞信部となり今日に及べり。

本島に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、昭和五年度に於て通常郵便は引受六千六百八十萬、配達七千八百萬、電信は發信及著信各百五十萬、爲替は振出貳千七百四拾萬圓、拂渡千六百七拾萬圓、貯金預入壹千七百五拾萬圓、拂戻壹千七百參拾萬圓、現在高壹千六百萬圓、振替貯金は口座受入七千八百萬圓、拂出七千八百萬圓、現在六十五萬圓なり。又同年度末現在に於ける電話加入者數は一萬三千、年度中加入者發信通話度數は六千百萬なり。

今之を内地其他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通じて最多數を示すは樺太にして、最少數を示すは朝鮮なり。

(イ) 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便
 配引
 人口十に對する
 引受

六六、七九三、三二八
 七八、四五三、〇七九
 一四五・四

電信
 著發
 人口十に對する
 信

一、四九〇、五二四
 一、五三二、九九三
 三・二

爲替
 拂振
 人口十に對する
 出

二七、三七五、一五五
 一六、六九四、八〇六
 五九・六

貯金
 拂預
 人口十に對する
 入

一七、五五三、八二九
 一七、三三四、四六二
 一六、〇七四、三八八
 三八・二

振替貯金
 口座
 座人員一に
 在付

七七、八八七、三七二
 七七、八九四、二三三
 六四八、〇四七
 一五〇・一

年度末現在
 加入者數
 年度中
 發信通話度數

一一、七四六
 六一、三三五、七一一

電

話

人口千に付
加入者に
加入者に
付通話数

(口) 内地其他との比較 (昭和五年度)

人口十に對する

電話

二八
四、八二二

臺 朝 樺 關 北 内

海 鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は拓務省統計概要に依る。
地 府、内地府縣は昭和四年度の事實にして帝國統計年鑑に依る。
海 道、

通郵便
引受

電報
發信

爲替
振出

貯金
預入

公衆
電話

電
話
加入者

一四五・四

三・二

五九六・円

三八・二

三〇

一三、〇五四

一一七・五

二・五

四六・一

一九・二

六五

三二、六六四

七六五・〇

三八・五

六五六・四

二六一・四

九

五、一五四

四三六・二

一五・二

一一八・四

一九二・四

一一四

一九、四六〇

七八九・〇

一九・〇

二二七・八

二四九・五

?

六九〇、〇四三

七七九・三

九・五

二二七・八

三三五・〇

?

公學校兒童	五二,五四〇	二四八,四七八	四八二
中等學校生徒	一,〇〇七	九,九〇五	九八四
實業學校生徒	五八	二,七四九	四,七四〇
實業補習學校生徒	—	一,五二九	—
師範學校生徒	五三一	一,一九〇	—
專門學校生徒	二一〇	八三一	二二四
高等學校生徒	—	六〇二	三九六
大學學生	—	一八〇	—
官設鐵道線路延長	三〇三哩	六二〇哩	二〇五
運輸—乘客賃金	二,二二五,八九四圓	八,二二〇,六七三圓	三六九
收入—貨物賃金	二,五四八,〇三四圓	一,一三八九,四二二圓	四四七
私設鐵道線路延長	八〇八哩	一,三九一哩	一七二
郵便、電信及電話	—	—	—
通常郵便引受通數	三〇,五七五,二二四	六六,七九三,三二八	二二八
電報發信通數	九〇三,三六一	一,四九〇,五二四	一六五
爲替振出金額	一四,三九七,〇四五圓	二七,三七五,一五五圓	一九〇
貯金預入金額	三,一九六,二四三圓	一七,五五三,八二九圓	五四九

電話 { 年度末現在
加入者
通話次數

三,七五八
一七,六三四,六二〇

一一,七四六
六一,三三五,七二一

三三九
三四八

昭和七年六月二十七日印刷
昭和七年六月三十日發行

臺灣總督府

印刷人 中村誠道
臺北市本町一丁目十九番地

印刷所 松浦屋印刷部
臺北市榮町一丁目二十七番地



